

母たちの包茎戦争

——あるいは1980-2010年代の小児包茎言説は何を語っていないのか——

澁谷 知美

Abstract

The purpose of this study is to examine historical discourses around caring methods for pediatric phimosis through answering the question: “What kinds of statements were excluded and unspoken in the discourse on the caring method of pediatric phimosis?” In order to answer this question, we examined the following three working hypotheses: (1) Information for parents about pediatric phimosis remained confused for 40 years, (2) The discourse for mothers on pediatric phimosis is constructed with sympathetic and horizontal discourse, and urges mothers to choose which caring method is best for themselves and their children. On the other hand, the discourse threatens mothers to take too much responsibility for child genital care. However, from the 2010s, we can find a discourse encouraging mothers to seek cooperation from their husbands. (3) There is no discourse which urged fathers to perform genital care for their children until the 2010s. To examine these working hypotheses, we collected 57 samples of articles and books on pediatric phimosis, which were written for parents and published from 1979 to 2016. Upon examination of our working hypotheses, (1) was almost denied, (2) was partly denied and partly affirmed, and (3) was almost affirmed. Analysis therefore demonstrates that the discourse on caring methods for pediatric phimosis did not articulate a clear policy and useful guidelines for caring, ignored the sympathetic and horizontal discourse which was exchanged in mothers’ peer group, and lacked tips for mothers to encourage their husbands to do genital caring for their children, as well as discourse to guide fathers in genital care.

1 問題

「もう、ばく、学校へ行かない……」

滝子は、その理由を聞きだすのに、どれだけ骨を折ったか、知れなかった。やっと、彼が答えたところによると、休み時間に、運動場で、級友が寄ってたかって、彼の猿股を脱がせ、生殖器にイタズラをした挙句、

「東京者は、皮垂れ坊！」

といて、ハヤしたてたというのである。

「何のこと、それ？」

滝子は言葉の意味がわからなかった。

(獅子文六「おちんちん」1971年)

本稿の目的は、「小児包茎の対処法をめぐる言説は、何を語っていないのか」という問いに答えることである。

2017年4月、「息子のちんちん大丈夫? 「むきむき体操」とむきあう母親の不安と孤独」という記事がネット上で話題になった。男児の包茎や包皮防止のために継続的に行う包皮反転／^{ほんてん}翻転には賛否両論があり、混乱する情報のなかで母だけが悩み、父は無関心を決めこむか尻ごみするという内容である(小林 2017)。同内容の話題は2001～02年、2010年にも週刊誌で取り上げられている。乳児期の息子に包茎手術をするべきかを問う母からの相談も、1979年の婦人雑誌に見つかる。「小児包茎に悩む母」というテーマは新しいようでいて歴史がある¹⁾。

なぜ「情報の混乱のなか、女親ばかりが悩み、男親は遠ざかる」状況が40年近く展開しているのだろうか。すぐに思い浮かぶのは「母親と違い、父親は子どもと接する時間が短いから」という理由だが、それは単純に過ぎるだろう。第一に、小児とはいえ包茎は男の問題だからである。男性である父親こそが本領を発揮できるであろう分野なのにもかかわらず、遠ざかってしまうのには、「接する時間」だけでは説明できない事情があるためと考えられる。第二に、性器ケアが組みこまれていてもおかしくない育児仕事に、父親もかなりのていど参与しているからである。2011年の調査によれば、「子どもをお風呂に入れる」ことを「した(している)」と答えた父親は約75%であり、「おしめをかえる」も44%を占める(時事通信社2013)。入浴とおむつ替えに、性器を清潔に保つ性器ケアの仕事は付きものであり、こうした現状をふまえると、「子どもと接する時間の短さ」を持ち出す説明は的を外しているといわざるをえない。

なぜ「情報の混乱のなか、女親ばかりが悩み、男親は遠ざかる」状況が40年近く展開しているのか。この問いに取り組むことで、父親が息子の性器ケアに関与しない理由が明らかになるだろう。そこから、父親が関与できる条件を導出し、父親が関与できる環境を整え、

母親の負担を減らすことができるかもしれない。また、「男性器を持つ新たなアクター」として父親が男児の性器ケアに参加することにより、「当事者」の声が反映され、「情報の混乱」が整理される可能性もある。

本研究では、小児包茎言説における父親向けメッセージと母親向けメッセージの違いに着目しながら、それぞれの言説が何を語り、何を語っていないのかを明らかにする²⁾。「語られていない部分」に着目するのは、それが語られることにより、「情報の混乱のなか、女親ばかりが悩み、男親は遠ざかる」状況が改善するのではないかとの期待があるからである。

具体的には、以下の作業仮説を検証する。

作業仮説① 小児包茎をめぐる情報は40年ちかく混乱し続けている。

作業仮説② 小児包茎をめぐる母親向け言説は共感的・水平的な形式を取り、どのような選択肢を選ぶかは母親に最終的に決定させる内容を持つ。ただし、それは母親にとって脅迫的なメッセージをも内包する。一方、2010年代以降は、父親に協力を求めるよう母親に促す言説も見られる。

作業仮説③ 父親を性器ケアに向かわせる言説は存在しない。だが、2010年代以降は別である。

それぞれの作業仮説を導出した背景について説明する。①の「小児包茎をめぐる情報は40年ちかく混乱し続けている」は小児包茎に悩む母たちをめぐる各種報道を受けてのことである。報道では、「処置の方針が医師や病院によって大きく違っている」（『週刊朝日』2002年10月18日：146）、「子どもの包茎に対してどのような処置をすべきかという問題は、小児医療界でも意見が割れて、論争を引き起こしている」（『週刊ポスト』2010年11月19日：137）といったフレーズがおきまり文句のように繰り返されている。前述のように、早くも1979年の婦人雑誌には、乳児期の息子に包茎手術をするべきかを問う母からの質問が見つかる。この母親は、近所の小児科で子どもの包茎手術をすすめられた。だが、5カ月の子どもに手術を受けさせることに躊躇しており、いったいどうしたらよいかを相談欄に問うたのだった。これにたいする医師の川村猛の返答は、「なるべくなら、手術はさけたいものです」であった（『婦人生活』1979年9月：251）。

ここにすでに医師間の対立する意見があり、小児包茎をめぐる情報の混乱がある。より広範囲の資料を閲覧してもなお情報の混乱が見られるのかどうかを確認したい。情報の混乱のいかんを明らかにすることは、「女親ばかりが悩む」状況の前提条件を知るために不可欠である。

作業仮説②「小児包茎をめぐる母親向け言説は共感的・水平的な形式を取り、どのような選択肢を選ぶかは母親に最終的に決定させる内容を持つ。ただし、それは母親にとって脅迫的なメッセージをも内包する」は、育児言説をめぐる先行研究の知見をふまえてのことである。高橋は、戦前期の育児言説が専門家の啓蒙に代表される「垂直的言説」だったのにたい

し、1970年代以降のそれは読者参加型雑誌に象徴される「共感的・水平的」なものに変化したと述べる。そして、母親たちが自ら主体的に選択・構築していく教育実践がそこにはあるように見えるという（高橋 2004：102）。

とはいえ、「主体的」に選択・構築できることは、母親が「自由」であるとか、育児が「楽」であることを必ずしも意味しない。「家庭教育」をめぐる母親に調査した本田によれば、母親は家庭教育に「葛藤」を覚えている。社会には、子どもの自発性の重視、基礎学力向上、生活習慣の定着、「やりたいこと」を見つけることの重要性といった、多様でしかもそれぞれが容易には達成できないような、「家庭教育」の課題に関する言説が存在する。母親はそれらのいずれを選択してどこまで全うすべきなのか、そして全うしようとしても子どもから自分の意図した通りの反応が得られない場合にどうすればいいのかについて、不断に悩まざるをえなくなっている（本田 2008：225）。

同じことは、多様な言説を抱える（と予想される）子どもの包茎についてもいえるだろう。我が子にとって何がベストなのか、多様な選択肢の前で「主体的」に選択・構築していけるからこそ、母親は「不断に悩まざるをえなくなっている」。そして、言説とのかかわりで考えると、言説は、母たちの「悩み」を解消せず、むしろ増幅させるような脅迫的なメッセージを持っていることが推察される。そこで、「ただし、それは母親にとって脅迫的なメッセージをも内包する」を作業仮説に付け加える。

作業仮説③「父親を性器ケアに向かわせる言説は存在しない。だが2010年代以降は別である」の前段については、Sharpe（1994：77）が、性にまつわる子どもの教育に父親はコミットしないことを指摘していることから導出した。また、乳幼児期の男児を持つ日本の母親20名にインタビューしたCastro-Vázquez（2015: Chapter 6, Penile Infections）は、夫が子どもの包茎について情報をくれたと答えた者は皆無だったと述べる。父親を性器ケアに向かわせる言説は、おそらく存在しない。

後段として「だが2010年代以降は別である」という留保を付した。この時期、イクメンブームが到来した。前述のとおり、「子どもをお風呂に入れる」、「おしめをかえる」作業の経験者は父親のなかに一定の割合で存在する。性器ケアの知識なしにこれらの作業はできないので、父親に対しても何らかの情報やメッセージが発信されていると考えられる。父が「遠ざかる」のは、メッセージがまだ浸透していないからであり、言説じたいは少なくとも2010年代以降は存在するはずである。

あわせて、作業仮説②も修正が必要だ。母親に向けても、「パパの協力をあおぎましょう」といった言説が2010年代以降には見られるのではないか。そこで、「一方、2010年代以降は、父親に協力を求めるよう母親に促す言説も見られる」を付けた。

以下では、これら3つの作業仮説について検証する。

2 方法

本稿で採用するのは言説分析である。閲覧した資料について説明する。第一に、雑誌『ひよこクラブ』1993年創刊号から2016年12月号までの性器ケア、入浴、おむつ替えに関する記事のうち、小児包茎についての記述を含むものである。さらに、特に父親に向けた言説があると考え、同誌の「男の育児特集」や父親からの投稿にも小児包茎にまつわる記述を探した。

結果として、性器ケアや性器の病気の特集記事以外に、小児包茎にまつわる記述を見つけることはできなかった。小児包茎にまつわる話題は、性器ケアと病気の記事に出現するのみであり、あたかもその枠外からはみ出すことが許されていないかのようである。

第二に、大宅壮一文庫および国立国会図書館データベースで「包茎」「おちんちん」でヒットする戦後の雑誌記事のうち、小児包茎についての記述を含むもの、第三に、子どもの性器ケアを主なテーマとした育児本、である。結果、1979年から2016年にかけて刊行された57件が集まった。そのリストが表1である。

内容からいって記事は2種類に大別される。子どもの包茎や性器のケアをいかにすべきかという方法論を説くものと、子どもの包茎の対処に奔走する母親たちを取り上げて、「こんな現象がありますよ」と第三者の視点から報道ないし論評するものである。後者に当てはまるのは7件であり、本稿で扱う資料のほとんどは方法論の記事である。

併せて、堀込ら（2003：60）が調査した包茎にまつわる育児書の言説、小児包茎にかんする医学雑誌の記事を適宜用いる。

なお、育児中の母親にとって主要な情報ツールとなっているインターネット上の言説はあえて扱わなかった。コーパス（資料体）としてどこからどこまでを扱えばよいのかが漠然としているうえ、いつ書かれたのか分からない記事も少なくないためである。本稿で主な資料とする『ひよこクラブ』は、90年代半ばの発行部数が月に30万部前後であり、育児雑誌のなかでは圧倒的な人気を誇っていた（石黒2004：105-6）。かつてほどの勢いは失ったとはいえ、『ひよこクラブ』は現在においても最もポピュラーな育児雑誌のひとつであり、この雑誌を縦覧していくことで、ある程度の言説の流れを押さえることはできると考える。

表1 小児包茎をめぐる書籍および雑誌記事（1979～2016年）

媒体	報道・ 論評	著者名／雑誌名	刊行年	刊行月	刊行日	書名／記事タイトル
雑誌		婦人生活	1979	9		「赤ちゃん・幼児の包茎の悩み」
書籍		矢島暎夫	1981	6		『まじめなおちんちんの話 赤ちゃんからお父さんまで』冬樹社

母たちの包茎戦争

雑誌		婦人倶楽部	1981	9		「妻の知らないオチンチンのほんととウソ 赤ちゃんから夫まで」
書籍		矢島暎夫	1982	3		『まじめなオチンチン相談室』冬樹社
書籍		大田黒和生	1984	7		『ママも知らない ボクのオチンチン』講談社
書籍		高橋悦二郎・水野肇・矢島暎夫	1988	7		『0～3歳の安心育児 脳からオチンチンまで』小学館
書籍		五味常明	1990	9		『母親はなぜ息子育てが下手か 息子の中のおとこ育て』ハート出版
雑誌	○	クロワッサン	1991	7	25	「友へ 診察室から 3回 この子包茎なんです。」
書籍		矢島暎夫	1992	7		『男の子を知る本 まじめなオチンチンの話』集英社
雑誌		ひよこクラブ付録	1993	11		「腎臓・尿路・外性器の病気」
雑誌		ひよこクラブ	1994	4		「小児科最前線 不思議な赤ちゃんのオチンチン 知っておきたいオチンチンのケアと病気」
雑誌		微笑	1994	5		「素敵なママ学 わが子のおチンチンとの上手なつきあい方 …素朴な疑問から包茎予防・病気発見法までにお答えしました」
雑誌		ひよこクラブ	1995	7		「女のママにはわからない男の子のおちんちん」
雑誌		ショッピング	1995	9		「こども健康相談室 包茎 成長とともに治ることが多い。心配な場合は小児専門の泌尿器科で診察を」
書籍		五味常明	1996	2		『お母さんのオチンチン育て』青樹社
雑誌		ひよこクラブ	1996	7		「赤ちゃんの全身チェックシート」
雑誌		週刊朝日	1997	4	11	「名医が答える先進医療 子どもの病気包茎」
雑誌		ひよこクラブ	1997	5		「ママにはわからない おちんちんXファイル」
書籍		矢島暎夫	1997	12		『はじめまして男の子 お母さんのオチンチン教室』フリープレス
雑誌		ひよこクラブ	1997	12		「おちんちんやおしりの病気」
雑誌		ひよこクラブ	1999	5		「おちんちんと女のコの性器の不思議知り隊」
書籍		五味常明	1999	10		『新版 お母さんのオチンチン育て』青樹社
雑誌		ひよこクラブ付録	1999	12		「包茎」
雑誌		ひよこクラブ	2000	7		「赤ちゃんの性器ケア&病氣質問箱」
雑誌		週刊宝石	2000	11	2	「アメリカでは新生児の8割に実施！日本の父親に告ぐ…息子の包茎手術は8歳までにせよ！」

書籍		高橋 剛	2000	12		『こどもの包茎相談室 Q & A とイラストで解説』 近代文芸社
雑誌	○	AERA	2001	2	12	「お母さんのおちんちん騒動記 むくべきか、むかざるべきか」
雑誌	○	女性セブン	2001	3	8	「若いお母さんたちに急増中 おチンチン育児不安はこれで解消！ 「手術が必要？」 「大人になって結婚できる？」 ほかにズバリ快答」
雑誌		ひよこクラブ	2001	4		「赤ちゃんの性器ケア&気がかりまるとご解決講座」
雑誌		ひよこクラブ付録	2001	11		「性器がおかしい／腎臓・泌尿器・性器の病気」
雑誌		ひよこクラブ	2002	4		「赤ちゃんの性器ケアと病気解決ノート」
雑誌	○	週刊朝日	2002	10	18	「エッ 「包茎は小学入学前に手術すべき」ってホント!？」
雑誌		ひよこクラブ付録	2002	12		「性器がおかしい／腎臓・泌尿器・性器の病気」
雑誌		ひよこクラブ	2003	7		「症状別ママがよくわかる赤ちゃんの病気ガイド vol.48 性器・泌尿器のトラブル」
雑誌		週刊朝日	2003	7	11	「こどもの病気シリーズ⑤ 停留精巣と包茎」
雑誌		ひよこクラブ	2004	4		「症状別ママがよくわかる赤ちゃんの病気ガイド vol.60 性器・泌尿器のトラブル」
雑誌		日経ヘルス	2004	7		「キッズヘルス 5回 子供の包茎に手術は不要 入浴時に包皮をむいて清潔に洗う習慣を。亀頭部は必ず出るようになる」
書籍		五味常明	2004	9		『“性長”なくして“成長”なし 目からウロコの「男の子」育て (新装改定版 お母さんのおチンチン育て)』 ハート出版
雑誌		ひよこクラブ	2004	12		「これで今日から怖くない！ 性器のお手入れ緊急講座」
雑誌		ちいさいおおきい・よわいつよい	2005	5		「こどものからだ相談室 包茎, 「洗ってアカをとって」などと医者もいすぎたよね」
雑誌		ひよこクラブ付録	2005	9		「性器が気になる／腎臓・泌尿器・性器の病気」
雑誌		ひよこクラブ	2006	7		「症状別ママがよくわかる赤ちゃんの病気ガイド vol.83 性器・泌尿器のトラブル」
雑誌		ひよこクラブ	2007	4		「男の子 女の子 性器のお手入れ A to Z」
雑誌		ひよこクラブ	2008	5		「ふき方, 洗い方, かかりやすい病気がよくわかる！」

母たちの包茎戦争

雑誌		ひよこクラブ	2009	6		「男の子・女の子 性器のお手入れ ABC」
雑誌	○	AERA	2010	3	29	「夫より子のおちんちん ママたちの「包茎心配症候群」」
雑誌		ひよこクラブ	2010	4		「男の子・女の子 まるわかり性器のお手入れ」
雑誌	○	週刊新潮	2010	10	28	「サイエンス宅配便 73回 赤ちゃんの「ムキムキ体操」」
雑誌	○	週刊ポスト	2010	11	19	「あなたならどうする？ 大論争 「むきむき体操」は立派な男子を育てるのか 親心か見栄か、それとも余計なお世話か」
雑誌		ひよこクラブ	2011	5		「お股と肛門 性器のお手入れこれで心配なし!!」
書籍		矢島暎夫	2011	7		『0～9歳 男の子のママへ まじめなおちんちんの話』カンゼン
雑誌		ひよこクラブ	2012	5		「迷いどころをスッキリさせよう！ 性器のお手入れ まるわかり Q & A」
書籍		岩室紳哉	2013	9		『ママもパパも知っておきたい よくわかるおちんちんの話』金の星社
雑誌		ひよこクラブ	2014	8		「遅咲き男の子と早咲き女の子はどう育つ？ どう育てる？」
書籍		岩元妙子監修・指導, 桐山梨江作画・漫画	2015	7		『男の子のママへ 子供が大人になって悩まない おちんちんケア』アイテック
雑誌		ひよこクラブ	2016	4		「“おちんちんの皮”むく？ vs むかない？ どっちが正しいの？」
雑誌		ひよこクラブ	2016	7		「違いを知れば子育てが楽しく！ 男の子・女の子の育て方」

3 結果

現代的な小児包茎言説の歴史は、言説の形態にしたがって次の4つの時期に区分できる。第Ⅰ期は1980年から1992年であり、男性医師たちが執筆した書籍が中心となっている。男性である泌尿器の専門家が女性である母親＝シロウトを啓蒙する、典型的な「垂直的言説」の時代といえる。

第Ⅱ期は1993年から2002年であり、『ひよこクラブ』の記事が中心となっている。『ひよこクラブ』の刊行年である1993年を始発点とし、子どもの包茎に苦悩する母の記事がまとめて出された2001～2002年をこの時期の終点としている。この区分は、『ひよこクラブ』および類似メディアが小児包茎の対処法について広めた情報が一定程度ゆきわたった結果、多様な情報に振り回される母親が登場し、メディアでフレームアップされたという見方に基づいて行った。

高橋の指摘では、1970年代以降の育児言説は、母親の本音（これまでなら吐露することがはばかれた育児のしんどさを訴える声など）が聞かれ、母親同士が情報を交換しあう読者参加型の「共感的・水平的育児言説」が主流である（高橋2004：102）。だが、小児包茎言説にかぎっては、専門家による「垂直的言説」が支配的だ。なぜなら、包茎や「おちんちん」の話題は「女のママには分からない」（『ひよこクラブ』1995年7月号）ため、専門家に頼らざるをえないからである。「ウチはこうしてるよ」といった読者の声が入ることで、多少は「共感的・水平的」な雰囲気は添えられているものの、「添え物」以上の存在感を示すことはない。1990年代以降にあっても垂直的言説が支配的であることは、他の育児言説とは異なる小児包茎言説の特徴といえる。

第Ⅲ期は2003年から2010年である。相変わらず『ひよこクラブ』言説が中心の時期ではあるが、2010年に再度、複数の週刊誌が「子どもの包茎に苦悩する母」を主題化する。この二度目のフレームアップを第Ⅲ期の終点とした。そして、2011年以降から現在までを第Ⅳ期とした。

以下では、それぞれの時期区分にしたがい、①小児包茎をめぐる情報、②母親向けメッセージ、③父親向けメッセージを見ていく。

3-1 第Ⅰ期：男性医師による母親の啓蒙（1981～1992年）

現代的小児包茎言説の黎明期

1981年、町の開業医で泌尿器科医の矢島暎夫が『まじめなオチンチンの話——赤ちゃんからお父さんまで』を出版する。副題から分かるように、成人男性の読者はもちろん、「男の子をもった若いお母さん」をも読者として想定した本である（矢島1981：2）。

この本はたいへんな人気を博し、初版の1万5千部がたちどころに売り切れになった（『週刊サンケイ』1981年7月：166）。各種スポーツ紙、男性向け週刊誌が取り上げ、その反響の大きさに著者本人が驚いている（矢島1982：7）。半年後には、読者の質問に回答する『まじめなオチンチン相談室』が刊行され、1992年には『男の子を知る本——まじめなオチンチンの話』として文庫化もされた。内容とレイアウトを大幅リニューアルした版も2011年に刊行されている。『まじめなオチンチンの話』はいわば「オチンチン本」の横綱であり、矢島は小児包茎の大家である。

『まじめなオチンチンの話』では、恥垢の除去のため、母親が赤ん坊の包皮をむくようアドバイスされている。若い母親の恐怖感をおもんばかりつつ、「乳幼児のオチンチンの包皮を指でむいて亀頭を露出する操作は、決して恐ろしいことではな」く、「痛みなどは上手にやれば感じないのがふつう」といわれていた。反対に、成人男性のように快感を感じることもないというアドバイスも添えられている（矢島1981：29）。

数年後、子どもは痛みを感じないという説は微調整を加えられ、「亀頭の部分を強くこすったり、つかんだりすると痛がります」と書かれるようになる。だが、基本的には「当人にはそれほどつらいことではない」とされており（矢島 1988：55）、子どもは痛みを感じないが、痛みはきわめて軽微なものという前提が維持されていた。

『まじめなオチンチンの話』の3年後に、泌尿器科医の大田黒和生による『ママも知らないボクのオチンチン』が刊行される。矢島が「赤ちゃんからお父さんまで」のペニスを対象としていたのにたいし、こちらは乳幼児期の男児の性器ケアに焦点を合わせている。

矢島同様に、大田黒は、包皮と亀頭の癒着は「ちょっと痛いのを我慢させ」れば、はがすことができる、包皮翻転を肯定する（大田黒 1984：32）。だが、「もっとも、無理にはがさなくても、成長するにつれて、自然に剝離することが多い」、「入浴時に洗ってあげなさい」という人もありますが、無理にはがそうとしたり、いじらない方がよく、放置しておいても構いません」（大田黒 1984：32, 127）ともいっており、包皮翻転にたいする方針はきわめて不明瞭であった。

1990年には、五味常明による『母親はなぜ息子育てが下手か』という挑発的なタイトルの書が刊行される。この本も、その後、文庫版、新装版、新装改定版が出されて、2004年までロングセラーを続けることになる。矢島の『まじめなオチンチンの話』が「オチンチン本」の横綱ならば、こちらは大関として位置づけられうる。

五味の著書では、のちに岩室紳也が提唱者とされ、現在も耳にする「むきむき体操」に類似した「ムキムキ運動」がすすめられている³⁾。「ムキムキ運動」とは、恥垢の除去と包茎の防止のために、乳幼児期の男児の包皮をむくことである。亀頭が露出するまで包皮をむいては戻し、むいては戻す動作を数回くりかえす。

矢島と同様に五味も、子どもの包皮むきに躊躇する母親にたいして、「怖がらずに、ぜひとも実行してほしいものです」、「オチンチンをじょうずに洗ってあげることは、この時期の母親の重要な仕事のひとつ」と助言し、母親の恐怖心を解こうとしている。また、「じょうずにやれば、赤ちゃんが痛みを感じることはない」と述べているのも矢島と同様である（五味 1990：61, 58）。

しかし、子どもが大きくなってもムキムキ運動は続けるべきと述べる一方で（五味 1990：74）、乳児期を過ぎたあとの子どもの痛みについての言及はない。2, 3歳の子どものはたいい嫌がるという翻転反対派の医師のコメントや（『週刊ポスト』2010年11月19日：137）、2歳半の男児が包皮をむかれ、皮の内側に軟膏をすりこまれ、「火がついたように泣きわめき、足をばたつかせる」姿がリポートされるのは、もう少し後のことである（『AERA』2010年3月20日：36）。

1970年代末には存在した情報の混乱

包皮翻転をはっきり勧める矢鳥と、あいまいな大田黒の見解のちがいに顕著なように、現代も続く「むくべきか、むかざるべきか」をめぐる情報の混乱はすでに当時から始まっていた。育児書における包皮翻転の記載内容をまとめた堀込らによれば、1970年代末には「包皮翻転積極派」と「包皮翻転消極派」の2派の意見が言説空間に同時に存在している（堀込ほか2003：60）。

たとえば、前者にあたる羽仁説子・松田道雄『新しい育児百科』（1953年）は、「男の子なら、包皮をずらせ、脱脂綿でぬぐってやる」と書く。『ジョーリー博士の育児書』（1978年）も、無理は禁物としながらも、「包皮が簡単に戻るようなら、そっと戻して、間にたまっている恥垢を洗いなさい」とすすめている。

だが、後者である松田道雄『育児で困ったとき見る本』（1979年）は、まったく逆のことをいう。「お母さんのなかには、気にする人があって、包皮を反転させて、亀頭についている白い恥垢（カス）を洗ったりしますが、しないほうがよろしい」、「幼児の包皮の内部に恥垢がたまっているのは正常ですし、またそのままにしておいても、なんの異常もおこさないことも正常です」と、皮むきはもちろん、恥垢を落とすこともすすめない。松田は1950年代には「包皮翻転積極派」だったのだが、1970年代には「消極派」に「転向」したことになる。

こうした情報の混乱を受けてのことだろう。矢鳥の『まじめなオチンチン相談室』には、子どもの性器は自然のままでもいいと書いてある育児書と、入浴のときに洗ったほうがよいと書いてあるものがあり、まちまちでどうしたらよいかわからないという主婦からの投書が寄せられている。それにたいして矢鳥は「乳幼児といえども入浴時ごとに、オチンチンの皮をむいて亀頭を完全に露出させ、冠状溝まで出してお湯でやさしく洗ってあげてあげてをすすめています」と答え、具体的な洗い方も説明している（矢鳥1982：37-8）。「冠状溝」は亀頭の溝のことで、だいぶ深くむくことを意味している。とくに何もしなくてよいとする意見とは対極である。

五味の『母親はなぜ息子育てが下手か』にも、かかりつけ医に「洗わなくてもいい」といわれた場合、どのようにすべきかという問題が取り上げられている。このケースに五味は、「包皮をむく習慣は早く身につけさせるにこしたことはありません」と衛生的な観点から答え、皮をむいて洗ったことのない大学生ぐらいの若者が「オチンチンが臭くてしかたがないのですが」と五味のもとを訪れるエピソードを紹介している（五味1990：64）。包皮むきを習慣化しないとひどいことになるかと読者に思わせるには十分な記述だ。このように、「オチンチン本」の横綱と大関である矢鳥と五味は、ともに「包皮翻転積極派」であった。

嘲られ、叱責されながら責任を負わされる母親たち

ところで、母親向けの一連のアドバイスの合間あいまに、母親にたいする「軽口」がはさ

みこまれていることは注目に値する。たとえば矢島は、我が子のペニスが小さいのではないかと母親の悩みを「無意味」としたうえで、「お母さん、あなたの大きなオッパイだって子供のころは、小さかったはず。今も小さくて悩んでいる人もいるだろうが……」と冗談めかして書いている（矢島 1981：20）。

やさしくそっとお湯で恥垢を洗い落とせとアドバイスするくんだりでは、「まちがってもやけどをしそうな熱いお湯をかけたり、バスブラシでこするなどは厳禁です。お母さんのツラノカワとは違うのですから……」と述べている（矢島 1982：39）。読者である母親をこきおろしながら、それでも彼女たちがこれを冗談として受け止め、笑ってくれるであろうとの矢島の期待があらわれている。

女性誌に掲載の、矢島が監修した「オチンチン特集」では、母親からの質問の体裁で「あのう、同じ包茎でも、仮性とか土星とか、いろいろあるように聞きましたが」とあり、「カセイとドセイですか。それはドセイではなくて、仮性と真性です」と矢島が答えている（『婦人倶楽部』1981年9月：189）。質問はおそらく編集者が書いたものだろうが、「仮性と土星とか」というくだりに母親の無知にたいする強烈な嘲りがうかがえる。

母親たちはまた「男性的価値観」を理解しないゆえに叱責される対象でもあった。生後2か月の我が子が勃起をしたとあって相談にきた母親とのやりとりが次のように記されている。

「先生！ この子ったらもう立つのよ！ いやあねえー」

「なに二カ月でもう立った？ 何かにつかまってかい？」

「ちがうわよ。オチンチンが立ったのよ。この子、早熟ねえ！」

「お母さん、この子は、あなたに色気を感じて立ったんじゃないのだよ。あなたが考えているようなワイセツな感じなんかないんだよ。小さいけど、もう立派な男なんだと威張って見せているのだよ」

小さいながら、勃起したオチンチンには威厳がある。母親としてみれば、気味が悪く、不思議に思うのだろう。

おしめをとりかえるときとか、膀胱が小便で満杯になっているときなどは、生まれたばかりの男の子といえども、オチンチンが大きく硬く立つことがある。

この時期でも、すでに男としての存在を示しているのだ。……

ヤングママさん、子供がオチンチンを立てたからといって、変に勘違いしたり、驚くことはない。いくら小さくとも“男性の証明”をしているのだ、と理解して、むしろ安心すべきことなのだ。

（矢島 1981：21-2）

ここでは、乳児の勃起が、「“男性の証明”」、「男としての存在を示」すもの、「もう立派な男なんだと……見せ」るものとして位置づけられ、「威張」るに値し、「威厳」があるものとして意味づけられている。こうした「立派な」オチンチンに対置されるのが母親である。乳児の勃起を「気味が悪く、不思議に思」い、「変に勘違いしたり、驚く」無理解ぶりが批判

されている。つまり、乳児の勃起に象徴される「立派な」男性性と、それを解しない無知な母親に象徴される女性性とを対比したうえで、男性的価値観を讀者である母親に飲み込ませようとするのがこの文章である。

両者のコントラストは、この文章の傍に添えられた、股間に「日の丸の旗」を立たせた赤ん坊のイラストと、それを見て驚いたような呆れたような顔をする母親のイラストによっていっそうきわだっている。「日の丸の旗」には、矢島や編集者が乳児の勃起に何を見いだししているかが反映されているといつてよい。

皮むきの是非では矢島と意見を異にした大田黒も、男性的価値観を母親に受容させようとする点では矢島と変わらない。「お母さんのちょっとした言葉、「坊やのオチンチンは小さいのねえ」は、子供に性器劣等感を植えつけてしまうだけのことです」と警告し、「坊やのオチンチンは立派ね」とそれとなくほめてあげてください」と勧めている（大田黒 1984：28, 30）。性器の外見をほめられてうれしがる「価値観」は男性に偏って存在すると考えられるが、大田黒の文章は、その男性的価値観を母親に伝達しようとするものである。

このように、男児の性器ケア言説において、母親は医者や編集部から嘲られ、叱責される対象だった。その一方で、母親の責任の重さはしっかりと強調される。矢島は、山本監督との対談で次のように述べる。

矢島 ……「風呂に入るたびに、必ずむいて中を洗ってください」と世のお母さん方にいっているんですよ。それも生まれてすぐにやりなさいとね。……

山本 きれいな水でやらないといけませんね。しかし、親はそのぐらいの責任あるんだ。

矢島 それをやれば、今日来た坊や〔包茎手術を希望して来院した青年〕たちだって、半分は包茎にならずにすんだんだ。

山本 そうなると多少親の責任もあるデスね。

矢島 多少じゃないですよ。お母さんがそれをやるんです。

（強調引用者。山本・矢島 1982：148）

包茎には「多少親の責任」があると山本がいったのを受けて、矢島はわざわざ「多少じゃないですよ」と言い直し、責任重大であることを示唆したうえで、親は親でも「お母さん」が息子の包茎に責任を持つべきだとしている。

『まじめなオチンチンの話』では、子どもの亀頭包皮炎には「母親に責任の大半がある」（矢島 1981：29）とも書いている。「乳幼児期からお母さんが、子供のオチンチンを適切に管理していれば、子供が成長した思春期に包茎とか短小などで、悩み苦しむこともなくなる」という言葉（矢島 1981：31）は、母親のケアこそが息子の下半身に長期的な影響を与えるという認識があらわれている。

五味も、ムキムキ運動をしなかった場合どうなるかという問いを立て、「不衛生なことはもちろんですが、亀頭の発育も悪くなります。俗にいう「先細チンチン」となって、将来悩

母たちの包茎戦争

むことになりかねません。お母さんはこうしたことをぜひ心得てほしいものです」と、息子の将来をたてに母の責任の重さを説く（五味 1990：62-3）。

このように、1980年代から1990年代はじめの男児の性器ケア言説は、母親を嘲り、叱責しながら、「お前には息子の性器に長期にわたる責任がある」と母親を脅す構造を持っていた⁴⁾。

軽口をぶつけられるていどに地位が低く、「カセイとドセイ」と口走る無知をさらけ出すのが医師や編集者にとっての「母親」ならば、このような者に男児のケアは任せられないという意見が出てもおかしくない。だが、彼らは、自身が軽んじる相手を、重要任務である「男児の性器ケア」に当たらせるのだった。

父のポジション

母の責任が強調される一方、当時の医師たちにとって、父親を男児の性器ケアに当たらせる発想は、はじめからなかった。『まじめなオチンチンの話』、『ママも知らないボクのオチンチン』には、父親が直接ケアに当たることを想定してのアドバイスはない。『まじめなオチンチン相談室』に、子どもの包皮をむくの躊躇するようなら、「まず、ご主人にでもやらしてみてください」と母親に向けたメッセージが簡潔に書かれているのにとどまっている（矢島 1982：39）。

『母親はなぜ息子育てが下手か』は別で、父親の参与を期待している。母親が抱きかかえる幼児のペニスに父親が手をかけている入浴シーンのイラストもある。だが、著者の五味はあとがきで「世のお父さんたちが、書店でこの本を手にとって読まれることはまずない」、「お父さんに、お母さんがいくらシリをたたいても、けっして息子のオチンチン育てなどに参加してくれることはない」と書いており、父親が男児の性器ケアを担当する可能性はきわめて低いと見積もっている（五味 1990：60, 240-1）。

当時の医師たちが、男児の性器ケアへの父親の関与を度外視したのはなぜだろうか。現代ほど父親の育児へのコミットが盛んでなかったという時代相もあるだろうが、「性」という問題に特有の事情もあると考えられる。

たとえば、性教育学者の大塚二郎が1960年に刊行した保護者向けの読本では、子どもの性に不真面目な態度で接する父親たちが批判されている。初恋にあこがれる中学生の息子に「お前も相手が欲しかったら、上野に行って捜すんだなあ！ 相手はいくらでもいるぞ」とナンパもしくは買春を冗談まじりにすすめて、息子を激怒させた父親、中学2年生の息子といっしょに入浴して股間に発毛を認め、「おい、変なものがついてるね」と冷やかして、それ以降、息子との入浴の楽しみを失ってしまった父親が戒められている（大塚 1960：121-2）。

父親が息子の性にかかわる時には、きまって自分自身の「うしろめたさ」を感じてしまうと指摘するのは五味である。「つまり、父親と息子は「同性」であり、互いに、男としての

「獣性」を体内に潜めている」からだという（五味 1990：240）。

五味のいう「獣性」が何を意味するのか、これ以上の詳しいことは書かれていない。だが、大塚の言葉に照らしあわせてみるに、ナンパや買春といった「うしろめたい」行いをしてきた経歴、冗談や冷やかしを通じてしか性について語れない語彙の不足などが含意されていると考えられる。

つまり、性について我が子に説く資格が父親にはないという認識が、専門家の間で分かち持たれていたということではないか。父親を性器ケアに当たらせる選択肢がはじめてから除外されていた背景には、こうした事情があったと考えられる。

父親向けの空虚な助言

とはいえ、五味は『母親はなぜ息子育てが下手か』本文のなかで、父親が息子と一緒に入浴するさいに性教育をほどこすことを勧めている。その名を、スキンシップならぬ「オチンチンシップ」という。目的は「包茎などの性器コンプレックスを防ぎ、りっぱな大人のオチンチンに育てること」である（五味 1990：80-1）。

実施方法の説明はきわめて具体的だ。父から息子に、「いいか、こうやって皮をめくってオシッコのかすを洗い落とすんだぞ」、「一人でお風呂に入るときや、お母さんと入るときも、自分で皮をめくって洗えよ」と、読者がそのまま使えそうなセリフを記して指南している（五味 1990：81）。

さらに、五味は父と息子の「オチンチン遊び」も勧めている。オチンチン遊びとは、性教育の一環として、息子に父のペニスをさわらせることをいう。

「ほら、お父さんのオチンチンはこうなっているんだぞ。ちょっと引っ張ってごらん」

「あっ、おもしろい、ゴムみたいに伸びる！」

「イテテ、あんまり強く引っ張ると痛いよ」

わたしは子どもとお風呂に入ったとき、意識的にオチンチンにさわらせて遊ぶことがあります。「いやらしい！」なんて誤解しないように願います。こうした「オチンチン遊び」はあくまで父親としての子育ての一環なのです。

男の子の前で必要以上にお父さん自身のオチンチンを隠さないこと。むしろ、ときには意識的にオチンチンを見せ、ときにさわらせて遊んだりする。これがたいせつだと思うのです。

（五味 1990：81）

息子に父のペニスを意図的に引っ張らせる。「これがたいせつ」だと五味は記している。多くの読者はこの「オチンチン遊び」に違和感を抱くだろう。五味もそのことを想定して、先回りして「誤解しないように願います」と断っている。そんな奇異な「遊び」を、五味は「子どもとお風呂に入ったとき」じっさいに行っていると述べている。

別の箇所では、引っ張らせるだけではなく、息子の前で包皮をめくってみせろとアドバイ

スしている。

時期をみて、お風呂で息子に自分のオチンチンをさらりと見せ、「いいか、いま皮めくりの癖をつけておけば、しぜんにお父さんのように先っぽの皮がスルッとむけて、亀頭が顔を出すんだぞ。皮むきをまめにやっていたら、包茎なんかにならないんだぞ」と説明します。

お父さんが仮性包茎でも恥ずかしがることはありません。子どもにしてみれば、すべてにおいて完璧なお父さんより、ちょっと欠点のあるお父さんのほうが親しみがわくというものです。「よく見てみるヨ。お父さんのは少し皮をかぶっているだろ。でも、ほら、皮を下におろせば亀頭が顔を出すだろ。こういうのを仮性包茎っていうんだけど、べつに異常ではないんだぞ。でも、おまえのはどうなるかまだわからんなあ。まめに皮むきっこをしていれば、あんがいスルッと皮がむけきるかもしれないぞ。ちゃんと皮をむいてきれいに洗っておけよ」という具合に教えることもできるはず。(五味 1990 : 110)

父親みずから仮性包茎の陰茎を息子の前にさらし、皮をむいて亀頭を出す実演をしろという。仮性包茎でも恥ずかしがることはない。ちょっと「欠点」があるほうが、息子は親しみを持つとのだという。「オチンチンシップここに極まれり」の感がある。

このように父と息子の「オチンチンシップ」を詳細な事例とともに五味は記す。だが、一連の記述に、読者はなんともいえない「嘘くささ」を感じないだろうか。父のセリフはたいへん具体的に書きこまれているものの、「～しろよ」、「～だぞ」、「～だろ」という語尾が絵に描いたような「父親らしさ」を表現しており、あまりにステレオタイプカルで、かえって現実味がない。父の性器を意図的に息子にさわらせる「遊び」や仮性包茎の皮むき実演も、性教育のために男親が自身の性器を息子に差し出すという行為が直截的にすぎて、こちらも逆にリアリティが感じられないのである。

それもそのはずだった。五味はあとがきでこう述べている。「読者に告白しなければならないことがあります。それは、わたしには息子がいないということです。わたしは、男の子を育てたことはありません」(五味 1990 : 242)⁵⁾。息子にたいし父がどうふるまうべきかを説いた各種アドバイスは、若者たちを診療した経験や、自分の若いころの体験にもとづいて書いたものであり(五味 1990 : 242)、じっさいに五味が自身で実行しているものではなかったのである。

つまり、「わたしは子どもとお風呂に入ったとき、意識的にオチンチンにさわらせて遊ぶことがあります」の一文は、まったくの虚構であった。そうすると、「オチンチン遊び」という行為、ひいては父と息子の「オチンチンシップ」そのものの実行可能性もあやしくなってくる。誤解をおそれずにいえば、オチンチンシップとは、息子のいない医師が、これまでの診察例や自己の経験にもとづいて「こういうことができたらいいな」と夢想した「机上の空論(しかもかなり突飛な)」の域を出ず、再現可能性がすこしでもある実施例ではないからだ。

以上のように、1980年代から1990年代のはじめには、息子の性器ケアをめぐる父親向けのアドバイスは存在しないか、あっても実行可能性の薄い、空虚なものにとどまっていた。こうした言説状況は、父を男児の性器ケアから遠ざけ、母親ばかりが責任を負う性別役割分業を維持する条件のひとつになっていたと考えられる。

3-2 第Ⅱ期：情報の混乱と、母たちのフレームアップ（1993～2002年）

むくべきか、むかざるべきか——『ひよこクラブ』における情報の混乱

1993年11月、乳児を持つ母親向けの育児雑誌『ひよこクラブ』が創刊される。戦後育児メディアの変遷をまとめた天童によれば、その誌面は、イラスト、写真中心のヴィジュアルと、読者モデルの多用に特徴づけられる。専門家の啓蒙的「解説」よりも、隣のママの子育て、失敗談、育児のコツといった、身近な「共感」型の知識を伝達しようとするものだった（天童2013：25-6）。

ただし、前述のように、いかに『ひよこクラブ』掲載の記事であっても、小児包茎をめぐるものにかんしては、「共感」型知識の伝達」という性格は当てはまらない。「専門家の啓蒙的「解説」」が圧倒的にドミナントであり、読者もそれを望んでいたからこそ、専門家が繰り返し登場してきたのだと考えられる。インターネットがさほど発達していなかった当時、同誌は読者の貴重な情報源だったと察せられる。

『ひよこクラブ』では包皮翻転の問題、つまり、むくか、むかないかの問題について、どのような情報を提供していたのだろうか。

同誌は創刊号から「包茎」を取りあげている。とはいっても、付録の「知っておきたい病気」のページにおいてであり、ありとあらゆる病気の一項目として「包茎」が触れられているのにすぎない。包茎についてのごく一般的な説明がなされたうえで、「亀頭包皮炎症」の項目に、「入浴時に包皮をむいて亀頭についたあかをぬるま湯で洗い流すよう、簡潔に述べられているのみである（『ひよこクラブ』1993年11月号付録：89）。

翌年以降、『ひよこクラブ』は包茎や亀頭包皮炎症をはじめとした男児の生殖器のトラブルを積極的に取りあげていく。「不思議な赤ちゃんのおチンチン 知っておきたいおチンチンのケアと病気」をはじめとして（1994年4月号）、「女のママにはわからない男のおちんちん」（1995年7月号）、「ママにはわからないおちんちんXファイル」（1997年5月号）、「おちんちんやおしりの病気」（1997年12月）といった記事が組まれた。「Xファイル」とは、超常現象をテーマとし、当時人気を博していた海外ドラマの題名である。

1999年以降は男児の性器と女児のそれは同じひとつの特集のなかで扱われるようになるが、当初は性器特集でフューチャーされるのは男児の性器のみであった⁶⁾。タイトルに顕著なように、男児の性器は「女のママにはわからない」「超常現象」であるとの認識が読者で

ある母親の間にあり、女兒の性器よりも読者の関心が高いと編集部が判断したためと思われる。

こうした特集のなかで、包皮翻転はすすめられていたのだろうか、否定されていたのだろうか。表2は、堀込ほか（2003：60）が調査した包皮翻転についての育児書の記述に、今回の調査対象である『ひよこクラブ』および各種週刊誌の記事、「オチンチン本」に掲載された包皮翻転の記述を書き加えたものである。堀込らに倣い、各記述を「包皮翻転積極派」と「包皮翻転消極派」に分けた。

この分類はきわめて便宜的なものであり、「積極派」のなかにも濃淡があることを付言しておく。たとえば、①入浴のたびに翻転せよという意見と、時々でよいとする意見、②恥垢をすべて取るように指示する意見と、お湯をかけて取れるぶんだけ取ればよいとする意見、③冠状溝までむくようにいう意見と、無理なくむけるところまででよいとする意見が、同じ「積極派」のなかに混在している。また、「積極派」にあっても、ほとんどの言説は「無理をしないこと」と注意書きしている。ただ、むくかむかないかでいえば、むくことを肯定している点で、これらの意見は「積極派」と位置づけられうる。一方、「消極派」内部でのバラつきはなく、「むいてまで中を洗う必要はない」という見解で一致している。

第Ⅱ期（『ひよこクラブ』創刊の1993年から2002年まで）の言説を表2で見ると、30件のうち、積極派12件、消極派13件ではほぼ半々である。子どもの成長によって対処が違おうとするもの、読者の寄稿と医師の助言とで見解が異なるもの⁷⁾、記述が簡潔にすぎて詳細が不明なもの、それと意識することなく両論併記をしてしまっているもの、メインに押し出されているのは積極派の見解だが消極派の見解も添えられているもの、が各1件である。

『ひよこクラブ』と他媒体での見解の違いがあるうえ、『ひよこクラブ』内部でも号によって見解が異なるのは注目に値する。「ママはつめを短く切り、手をきれいに洗ってむいてあげましょう」（2001年4月号：184）といった数か月後に、「包皮をむいてまでおちんちんを洗う必要はありません」と書いている（2001年11月号付録：25）。

違う号どころか、同じページのなかで異なることがいわれているケースもある。無理する必要はないが「むけたら中まで洗って」と記したすぐ傍に、「おちんちんは体の一部ですから、普通に洗ってください」、「デリケートな部分のケアはやりすぎるといけません。むしろ「たりないくらいがちょうどいい」と思っていてください」と抑制的なコメントが付される（2000年7月号：172）。何をどこまですればよいのか、読者は迷うしかない。ひとつの特集のなかでさえ編集方針が定まっていなかったことを伺わせる。

初期の記事では、「過度にお母さん方を心配させたり、刺激したくない」と思ったと編集者が内心を吐露している（1994年4月号：136）。だが、同誌のころころ変わるアドバイスや、一貫しない方針を見るかぎり、その望みは叶いえなかったと思われる。

表2 包皮翻転についての育児言説

堀込ほか 2003掲載	年	月	書名/記事名	著者名/ 掲載媒体名	包皮翻転 積極派	包皮翻転 消極派	内容
○	1953	5	新しい育児百科	羽仁説子, 松田道雄	○		男の子なら、ペニスの包皮をずらせ(ママ)、脱脂綿でぬぐってやる。
○	1978	10	ジョーリー博士の育児書	ヒュー・ジョーリー	○		子供が4歳ぐらいいなくなったら、入浴の時に包皮をそっと後ろへ戻すようにしてみます。戻らないような無理をしないで、もう少し子供が大きくなるのを待たない。包皮が簡単に戻るようになるなら、そっと戻して、間にたまっていない状態にしてください。子供がいてもいいやがるなら、特にきびしきつける必要はありませんが、この部分を清潔にしておかなければならないことを子供に話し、1人で入浴できるようにになったら、自分で洗えるように習慣づけておきましょう。
○	1979	10	育児で困ったとき見る本	松田道雄		○	お母さんのなかには、気にする人があって、包皮を反転させて、亀頭についている白い恥垢(カス)を洗ったりしますが、しないほうがよろしい。むりに反転すると、もとにもとらなくなり、むくみがきで、カントン包茎という状態になることがあります。/そしてむりに反転すると、内側に恥垢(カス)がたまっていきます。幼児の包皮の内部に恥垢がたまっているのは正常ですし、またそのままにしておいても、なんの異常もおこさなことも正常です。またおちんちんについては、赤くはれて痛がるというようなこともありません。特別な関心をもたないほうがいいと思います。入浴のたびに包皮を反転してやれば最
	1981	6	まじめなおちんちんの話 赤ちゃんからお父さんまで	矢島咲夫	○		これ(恥垢)は、おちんちんの包皮を指でやさしくむいてやり必ず取りさる必要がある。/若いお母さんにとっては、赤ん坊の小さくて、柔らかないおちんちんの包皮をむくなくて、と想像すると、多分に恐ろしさが先だつことだろう。/乳幼児のおちんちんの包皮を指でむいて亀頭を露出する操作は、決して恐ろしいことではない。また、痛みなどは上手にやれば感じないのがふつうだ。ましてや、成人男性のようにととても気持ちがいいというものでないもので安心してほしい。……できれば入浴のたびにやれば最
	1981	9	妻の知らないおちんちんのはんととウソ 赤ちゃんから夫まで	婦人倶楽部 (矢島咲夫監修)	○		白い粉チーズのようなこの恥垢は、お母さんの手で包皮をやさしくむいてやり、必ず取りさることが必要ですね。できれば、入浴のたびにお湯をかけて洗い流すくらいにしてほしいものです。……乳幼児のおちんちんの包皮を指でむいて亀頭を露出する操作は、決して恐ろしいことではありません。痛みなどは、上手にやれば感じないのがふつう。まして成人の男性のように、とても気持ちがいいといった風なものでもありませんからね、この点は安心です(187頁)。
	1982	3	まじめなおちんちん相談室	矢島咲夫	○		私は、泌尿器科医として、乳幼児といえども入浴時ごとに、おちんちんの皮をむいて亀頭を完全に露出させ、冠状溝まで出してお湯でやさしく洗ってあげておきます(38頁)。
	1984	7	ママも知らないボクのおちんちん	大田黒和生		○	入浴時に洗ってあげなさいという人もありますが、無理にはがそうとしたり、いじらない方がよく、放置しておいても構いません。亀頭包皮間の癒着が自然にはがれ、いつの間にか取れてしまうことが多いからです(127頁)。
	1988	7	0~3歳の安心育児 脳からおちんちんまで	高橋悦二郎・水野肇・矢島咲夫	○		亀頭の部分が皮で被われているために、このすき間に小便のカスや分泌物が集まり、恥垢となって炎症を起こす原因となる……できれば入浴のたびに、亀頭を出してきれいに洗ってやればいいのです(55頁)。

1995	9	子ども健康相談室 包莖 成長とともに治ることが多い。心配な場合は小児専門の泌尿器科で診察を(柳沢至規)	ショッピング	○	○	包皮と亀頭を無理にはがそうとしたために皮膚が傷つき、かえって包皮が硬くなったり、包皮輪が狭くなったりするケースもあります。ですから、お母さんが子供の赤ちゃんの皮をめくるのはやめてください。(66頁) ※[包皮と亀頭を剥離する処置を医師がした場合は]、またかぶせておきます(66頁)。皮から亀頭を出し、またかぶせておきます(66頁)。
1995	7	女のママにはわからない男の子の赤ちゃん	ひよこクラブ (中村孝指導)	○	○	亀頭と包皮の間に汚れがたまってきたりすることがありますが、ほとんどの場合は大きくない自然にむけてきまでも「亀頭を全部出してきれいに洗え」と言われてもできないと思います。血が出るほど力を入れてはいけません。むけるところまででいいのです。せつけんを付けて普通に洗いましょう(195頁)。 [亀頭包皮袋のコラム] 普段からよく洗ったり、小まめにおむつを替えることが大切です(195頁)。
1996	2	お母さんのオナチンチン育て	五味常明	○	○	※五味1990と同じ(62-6、80頁)
1996	7	赤ちゃんの全身チェックシート	ひよこクラブ	○	○	赤ちゃんはお赤ちゃんの皮がむけていないのですが、ほとんどの場合は大きくない自然にむけてきまします。だから無理やりむいて洗う必要はありません。むいて洗っているうちに血が出て、すぐ止まれば、大丈夫(8頁)。
1997	4	名医が答える先進医療 子どもの病気の病児 包莖	週刊朝日(高橋剛、小谷秀樹)	○	○	無理にむく必要はないのに、どうも誤った知識が広まっているようです(高橋剛、126頁) [新生児期には包皮と亀頭が癒着した真性包莖であっても、四、五歳ぐらいいまでは離れるようになり、その後、お父さんたちの膀胱でもわかるように、高校生になるまでには七五%の人が、ちゃんと亀頭が露出できるようになるわけです。]と、北谷助教も乳幼児期からの亀頭露出訓練には反対している。/包莖のために早漏になるとか、結婚生活に支障が出る、陰茎がんが多くなる、性感障害(STD)にかなりやすいといった説も、根拠に乏しいぞうだ(128頁)。
1997	5	ママにはわからない 赤ちゃん X ファイル	ひよこクラブ (中澤恵子)	○	○	おふろでのお赤ちゃんの洗い方と毎日、特別なことをするわけではありませんが、普段おふろで赤ちゃんの体を洗うと同じように(ママ)洗えば、まったく問題はありませんが、お赤ちゃんだからとくにいていけないとは思わないでね。また無理に皮をむいて洗う必要はありませんよ。(117頁)。
1997	12	お赤ちゃんやおしりの病気の病児	ひよこクラブ (小林尚)	○	○	●積極的言説 うちはほとんど毎日、おふろはパパ、ひざに横抱きにして、たまには皮をむいてきれいに石けんで洗って来ています(読者の寄稿、192頁)。 ●消極的言説 自宅で皮をむいて洗うことは赤ちゃんにとつてつらいこと。体を洗うように普通に洗って(小林尚、192頁)。
1997	12	はじめまして男の子のお母さんのおチンチン教室	矢島暎夫	○	○	ペニスの包皮は、そっとむけば痛くもありません(23頁)。 洗うといっても、小さいうちは、石鹸をつけてゴシゴシする必要はありません。ぬるめのお湯を何度かかけてあげられるだけいいのです。自分で洗えるようにならたら、ときどきは石けんで洗う習慣をつけます。はじめはくすぐったがりですが、何度も洗っているうち慣れてきます(28頁)。 包皮包莖の場合は、自分から皮をむこうとする努力をしなれば絶対に治りません。……そんなふうには普通段から皮をむく習慣がなかったために、包莖のまま大人になってしまふ男の人でも大勢います。なに「オチンチンなんかさわってはいけません」とか「子どものうちから心配することはない、放っておきなさい」という人が親だけでなく、お医者さんの中にもけっこういるのは、とても残念なことだと思えます(19頁)。 お母さんがお風呂で子どものオチンチンを洗ってあげようとして、皮がむけないのに気がつき、せつかお医者さんに相談したのに、「そんなこと心配しないでいい、放っておけ」とか「洗ったりするな、オチンチンにさわるな」などと叱られる場合があるぞうです。外国とは随分違いますね(22頁)。

母たちの包茎戦争

○	1997	最新版 スポック博士の育児書	ペンジャミン・スポック、マイケル・ローゼンバーグ	○	○	包皮をひっこめなくても、毎日のお風呂でペニスをきれいに洗ってあげれば、衛生上、問題はないう。無理に包皮をできるだけそとと、ひっこめてみると、ペニスの頭に白いロウウのようなもの(垢垢・スメグマ)がついているのが見えるでしょう。これまったく正常なことなです。垢垢は包皮と亀頭のあいだにある自然の潤滑油で、包皮の内側にいる細胞によって分泌されています。
○	1998	最初の子どもの育て方・しつけ方 Book	金子保、二木武監修	○	○	亀頭包皮炎の症状がみられたらほうっておかず、病院で診察を受けましょう。炎症には抗生物質の軟膏が処方されます。入浴したときに無理のない程度に包皮をむいて、中をきれいに洗い流してあげて、いつも清潔にしておきます。
○	1998	最新育児百科	菌部友良監修	○	○	男の子のおちんちんは、ふだんから包皮をむいて洗うようにしましょう。亀頭包皮炎は病院で処方された化粧止めの薬をぬれば治ります。女の子も陰部をよく洗い、清潔にしておきましょう。
○	1999	定本 育児の百科	松田道雄	○	○	包茎は幼児では生理的なものであるから、反転して亀頭を洗おうとしないことだ。かすがたまっていてもどうということはない。自分が包茎を手術した父親は気にして、子供の包皮を反転したりするが、しないほうがいい。むりに反転すると包皮の輪が亀頭をしめつけ、これに勃起がくわわると、もともどらなくなり、亀頭が紫色にはれあがる。
○	1999	妊娠・出産・育児安心ガイド	別冊 PHP 増刊号	○	○	皮をむいてガーゼで洗ってあげてくださいね。
○	1999	新版 お母さんのオチンチン育てて	五味常明	○	○	二歳半ぐらいいまでは、お母さんは、赤ちゃん時代にひきつづき、オチンチンのムキムキ運動をしてあげることがあります (82頁)。 ※五味1990、五味1996と同じ (62-4頁)
○	1999	おちんちんと女の子の性器の不思議知り隊	ひよこクラブ	○	○	おちんちんも、耳や鼻と同じで体の一部。特別扱いしなくていいのです。手に石けんをつけてよく泡立て、おなかやおしりを洗うのと一緒におちんちん全体を洗ってあげます。無理におちんちんの皮をむいて洗う必要はありません (173頁)。
○	1999	包茎	ひよこクラブ 付録	不明	○	反性包茎の場合は、おちんちんと包皮の間にあかがたまたまならないよう清潔を心がける以外には、特別な治療は必要ありません (90頁)。
○	1999	子育て育児の常識 ウソ!? ホント?!	細谷亮太	○	○	亀頭とまわりの皮膚の間はあかがたまたまやすいところ。むりやり皮層をむくことはないですが、よくお湯で洗い流し清潔にしておきましょう。
○	1999	妊娠・出産・育児がよくわかる のびのび育児百科	細谷亮太	○	○	おちんちんのまわりをでていねいにふく。おちんちんのまわりにもうんちがついていることもあるので、しわの帯つたところもでていねいにふきます。包皮をむいてまでふく必要はありません。
○	2000	1-2歳 どうしました? ② 健康の心配	菌部友良	○	○	皮をかぶっている赤ちゃんのほあい、白いかすが透けて見えることがあります。これは垢垢といって亀頭の上皮細胞が脱落したもので、決してバイ菌の集まりではありません。お風呂に入つたときにたたるんでいいる部分の皮を軽く引っ張り、シャワーなどをあてて汚れを取ってあげて清潔にしてください。

2000	12	子どもの包茎相談室 Q&A とイラストで解説	高橋 剛	○	○	<p>〔包皮ずり下げ法について〕赤ちゃんの時期は亀頭と包皮内板が1枚となっていてむけないのが原則です。この方法で無理にむくよう指導されて、赤くただれた状態となることがあります。また2-3歳以上になると、こどもはふられるのをいやがり、無理にすると出血したこともあります。そのほかこの方法を行っているうちに包皮口が狭いのに亀頭がでるんと出てしまふ、嵌頓（かんとん）包茎をおく少しづつ腫くすずり下げることのくり返しというものなのです。決して積極的にムキキにするものではありません（34-5頁）。</p> <p>無理やりむくのは決して良くありません。出血させるのも良くありません。……自然にむけてくるに合わせるように少しずつむいていくのがコツです（65頁）。</p> <p>ある医者の集まりで、こどもの包茎が話題になったとき「観念で包茎を全語むき、徹底的に垢垢をこそぎ落とすようにしている」という一人の泌尿器科医の話を聞きびっくりしました。そんなことをしたら、こどもは一晩中痛くて眠れないでしょう。でも現状ではお医者さんに行くのと、まぢまぢな扱いや説明をされるのがこどもの包茎なのです（86頁）。</p>
2000	7	赤ちゃんの性器ケア&病氣質問箱	ひよこクラブ (齋藤豊一)	○	○	<p>●積極的言説 お湯で温まってやわらかくなると皮はむけやすくなりますから、むいたら中まで洗って、おちんちんの真ん中あたりを指で程度と拭み、ゆっくりにやさしく下に引っぱりばります。中にたまったカス（垢垢）をシャワーで洗い流す程度でOK。その後、皮を上へ引き上げ、もとに戻します。引っぱってもむけないときは、無理してむかないで洗うだけにして（172頁）。</p> <p>●消極的言説 おちんちんは体の一部ですから、普通に洗ってください。／手に石けんをつけてよく泡立て、おしりを洗うのと同じようにおちんちん全体を洗います。……性器を洗うのにスポンジやガーゼを使って、おしりは、おすすめできません（172頁）。</p> <p>デリケートな部分のケアはやりすぎるといけません。むしろ「たりないくらいがいい」と思っていてください（172頁）。</p>
2001	4	赤ちゃんの性器ケア&気がかりまるごと解決講座	ひよこクラブ	○	○	<p>ペニスの皮はそつとむけば、痛いことはありません。ママはつめを短く切り、手をきれいに洗って、むいてあげましょう。皮と亀頭の間は恥垢と呼ばれる汚れがたまりやすい場所。むかなければ汚れはきちんとならぬままです。ただし、引っぱってもむけないときは、無理をしないで（184頁）。赤ちゃんが嫌がったら無理にはむかないで。……おちんちんが赤く腫れたり、おむつに膿がついていなければ、むいて洗わなくても大丈夫（186頁）。</p>
2001	11	性器がおかしい／腎臓・泌尿器・性器の病氣	ひよこクラブ 付録	○	○	<p>赤ちゃんのほとんどもは、包茎なので亀頭と包皮の間に垢垢がたまり、汚れやすい状態にあります。入浴の際、体のほかの部分と同じようにに洗い流して、清潔にしてあげましょう。包皮をむいてまでおちんちんを洗う必要はありません（25頁）。ママが無理に包茎をむいて中まで洗おうとすると、赤ちゃんに刺激を与えすぎることになりかねません（67頁）。</p>
2002	4	赤ちゃんの性器ケアと病氣解決ノート	ひよこクラブ	○	○	<p>●積極的言説 毎日する必要はありませんが、おちんちんの根元を持って包茎をそつと引っぱり、むいていきます。亀頭が出たら亀頭についていた汚れをよく洗い流して。カスがついていたら石けんを使って洗いましょう。むいた皮は元に戻してね。低月齢のところから始めましよう。／無理なこととはしないので！／包皮が陰茎に癒着している場合、無理に皮をむくととても痛く出血してしまふことさえあります。これ以上は無理？ と思つたらそこまでしておいて。少しづつ繰り返せばむけやすくなります（110頁）。</p> <p>●消極的言説 亀頭がよければ根元から包皮をゆつくりむいてお湯を流して洗います（112頁）。</p> <p>●積極的言説 お風呂に入つたときに、足のつけ根を洗いながら、ついでくらの感覚でおちんちん全体を洗います（111頁）。</p>

母たちの包茎戦争

2002	12	性器がおかしい ／腎臓・泌尿器・性器の病気	ひよこクラブ 付録	○	デリケートな部位ですから、入浴のときは体のほかの部分と同じく、ていねいに洗って、清潔にしておきましょう。／包皮はむいてまで洗う必要はありません(29頁)。お風呂のとき、ママが無理に包皮をむいて中まで洗おうとすると、赤ちゃんに刺激を与えすぎることになりかねません(63頁)。 ※判然としない言説 生理的包茎、仮性包茎の場合は、とくに治療は必要ありません。おちんちんと包皮の間にあかかたないように入らないように、お風呂に入ったときにきれいに洗ってあげましょう(65頁)。
2003	7	症状別ママがよくわかる赤ちゃんの病気ガイド vol.48 性器・泌尿器のトラブル	ひよこクラブ	○	ほとんどの赤ちゃんのおちんちんは亀頭と包皮がくっついていて、この間に垢垢という白いカスのような汚れがたまったりやすく、そのまましておくことで細菌が繁殖しトラブルを引き起こすことがあります。日ごろからお風呂できれいに洗ってあげましょう。洗うときは、包皮が楽にむけるところまでそっとママの指で押し下げ、泡立てた石けんでやさしく洗い、ぬるま湯で流せばOK。無理にむいて洗う必要はありません(205頁)。
2004	7	症状別ママがよくわかる赤ちゃんの病気ガイド vol.60 性器・泌尿器のトラブル	ひよこクラブ	○	ほとんどの赤ちゃんは、陰茎の先が包皮で覆われ、その間に垢垢という白いカスのような汚れがたまっています。垢垢をそのままにしておいてもあまり心配ありませんが、包皮が楽にむけるところまで引き下げ、ぬるま湯で垢垢を洗い流してあげればきれいになります。ただし、あまり神経質にならずに洗う必要はありません(189頁)。
2004	7	キッズヘルス5回 子供の包茎に手術は不要 入浴時に包皮をむいて清潔に洗う習慣を。亀頭部は必ず出るようになる	日経ヘルス (岩室紳也)	○	どんな包茎でも、包皮をむくケアを続ければ、亀頭部が出るようになる。手術は必要ない。……皮と亀頭部がくっついていている場合、むくとときに多少痛みがあるので、痛みに鈍感な0歳児のうちに親が行うのがベスト……3歳児以降で始める場合は、「少し痛むがやりたいか」と本人に聞いて、決めさせるといい(38頁)。
2004	9	“性長”なくして“成長”なし 目からウロコの「男の子」育て	五味常明	○	※五味1990、1996、1999と同じ(54-6、74頁)
2004	12	これで今日から怖くない！性器のお手入れ緊急講座	ひよこクラブ	○	陰茎が包皮に包まれているため、中にあかかたまってしまいうことがありますが、そのままにしておいても大丈夫ですが、むけるようなら、たまに包皮をそっと引っ張って皮をむいて洗ってあげるといいでしょう。ただし、あくまでも、無理のない程度で、が基本です(192頁)。 怖くないむき方講座／包皮の皮をむくのと、失敗しそいでドキドキしちゃうよね。でも、コツさえつかめば大丈夫！／無理せずむけるところまで(192頁)。

2005	5	産婦所・園・病院でいわれたことになり、「からだ編」と「からだ編」相談室 包莖、洗ってアカをとって」などと言った医師もいますよ	ちいさいおおいきい・よわいつよい	○	毎日のようにきれいにホースでそそぎとるように洗う人もいるし、シャワーでたんねんにやっつたりきれなく困っている人もいます。健康なところがあるね。それを反省している医者はいるよ (22頁)。 [質問者である母親の上の子は包莖だったが、下の子はすぐ包皮がむけた。が、炎症にかかると同じだった。包莖と炎症にかかると関係があるのかという質問に] 関係ないと思うよ。だから、基本的にはははははとくっつくこととどこが悪いの (23頁)。
2005	9	性病が気になる器・腎臓・泌尿器・性病の病気	ひよこクラブ付録	不明	陰莖と包皮の間にアカがたまると感染を起しやすくなるので、お風呂に入るときにきれいに洗いましょう (66頁)。
2006	7	症状別ママがよくわかる赤ちゃんの病気がイド・vol.83 性病・泌尿器のトラブル	ひよこクラブ (大塚清彦)	○	包皮はむかずに皮膚の表面を洗います。包皮をむいて洗うという説もありますが、私はおすすしめしません。包皮はむかずにやさしく洗って、清潔にしてあげましょう (大塚清彦, 205頁)。 炎症を起さないようにと、普段から包皮をむいて洗っていいと思います。一才5カ月のときに、たまにおむつ替えをしていた夫が息子の性病が赤く腫れていることに気がつきました。かかりつけの小児科で診てもらおうと亀頭包莖炎とのこと (206頁)。
2007	4	男の子・女の子の性器のお手入れ A to Z	ひよこクラブ (長雄一)	○	性病を洗うときは、むけるようなら包皮をむいて洗っていいですが、無理に引っ張るのは禁物 (216頁)。 赤ちゃんの陰茎は包皮で覆われているため、その間に垢垢という白いカスのような汚れがたまっていることがあります。濡れたままにしておくことと細菌に感染することがあるので、自然にできる範囲で包皮をむいて、ママの手でやさしく洗いましょう。赤ちゃんが嫌がるようなら、無理にむいて洗う必要はありません (217頁)。
2008	5	性病のお手入れ知って安心ガイド	ひよこクラブ	○	亀頭と包皮の間の垢垢という白いアカには細菌はなく、無理に取る必要はありません。恥垢により、自然に亀頭と包皮の分離が進んでむけやすくなります。ママが気になるなら、薬にむけるところまでむいて清掃綿でふき取って (227頁)。 白い点は、亀頭と包皮の間にたまる垢垢 (アカ) でしょう。皮膚の表面の新陳代謝によりできてきたもので、まだむけていないければ細菌に感染することもないので、無理に取る必要はありません。成長とともに包皮がむけてくることと自然に排出されます (229頁)。
2009	6	男の子・女の子の性器のお手入れ ABC	ひよこクラブ	○	1日1回、ママの手でやさしく洗います。亀頭と包皮の間に白いアカ (恥垢) が目に見えることがあります。無理に取る必要はありません。恥垢により亀頭と包皮の分離が進んで、包皮が自然にむけやすくなります。気になるときは、清掃綿でふき取ってもいいですよ (111頁)。 乳幼児の亀頭は包皮で覆われていて、通常は見えませんが、でも、成長して中学生くらいになると、自然に包皮がむけて、常に亀頭が露出した状態になります。包皮を早期にむくべきか、むかなくともいいかについては、医学的にも見解が分かれます。ただし、0才代で尿路感染症などの感染を起した場合は除けば、医学的には早期にむかなくともいいという根拠はありません。家族が早期に包皮をむくことを望むのであれば、無理にむかなくともOKです。/自然にむけることがほとんど (111頁)。

2010	4	男の子・女の子のママへまるわかり性器のお手入れ	ひよこクラブ	○	○	<p>Q 洗うときに、むいたほうがいいかむかないほうがいいか？／日本では、思春期以降は包莖を包莖でいいとされる社会的な見方があることでも心配するママやパパが多いようです。宗教上の理由で、包莖をむく、むかないに分かれることもありますが。けれども、赤ちゃんおときにむけていない子が、将来包莖ということにはなりません。自然にむけるのを待っても問題は無いです。(144頁)</p> <p>恥垢が臭いになるときは、包莖をむいて洗う／亀頭と包皮の間にある恥垢は、洗い落す必要はありません。気になるなら、包莖を引き下げ、ぬるま湯をかけて清潔に保ちます。(146頁)。</p>
2011	7	0～9歳 男の子のママへまるわかり性器のお手入れの話	矢島映夫	○	○	<p>●積極的言説 癒着があると、包皮を下げて亀頭を露出しようとしても、癒着しているところから下は下げられません。それを無理やり下げると、痛い亀頭が傷つきますので絶対にしてはいけません。……癒着があったら、洗うときに出せるところまで出して洗ってあげればいいのです。(68頁)</p> <p>子どものおオナチンチンは皮をかぶっていますので、洗うためには皮を下げて亀頭にお湯が届く必要があります。簡単に下げられる状態なら亀頭を出して洗ってやるといいんですが、下げるのに抵抗がある場合には、無理にそこから下げないようにして、できる範囲でお湯をかけてやればいいでしょう。</p> <p>●消極的言説 ただし、皮を下げて洗ってやらないと病気になるというわけではないので、あまり神経質にならなくても大丈夫です。(73頁)。</p>
2011	5	お股と肛門 性器のお手入れ2!! 裸で心配なし!!	ひよこクラブ (田村剛)	○	○	<p>赤ちゃんの皮をむいて洗う理由は、細菌感染のリスクを減らすため。でも、お風呂のたびに毎回むいて洗わなくても大丈夫。むいて洗わなかったからといって、赤ちゃんが病気になるわけにはありません。たまたまむいて洗ってあげただけでも、細菌感染の予防になります。皮をむく際は、赤ちゃんが嫌がらず、無理なくむける範囲までしておきましょう。(133頁)。</p> <p>ママに余裕があれば包莖をむいて亀頭を洗う／性器先端の衛生面が気になったら、包皮を少しだけむいて亀頭を露出させ、ぬるま湯をかけて脱脂綿で汚れ(恥垢)をふき取ります。(135頁)。</p> <p>毎日、皮をむいて洗います／産婦人科での沐浴指導の際に指導されたのをきっかけに、皮をむいて洗っています。初めはむくのが怖かったのですが、今は慣れて、1cmほど皮をむいてから泡タイプのボディソープで、毎回洗ってあげています。(読者の声、135頁)。</p> <p>皮をむいて洗うのは週に一度／3カ月検診の際、医師から「たまたまは皮をむいて洗ってあげて」と言われ、それ以来、週に一度は皮をむいて洗っています。先端をちょこっとむいて洗う程度ですが、これまでに恥垢がついていたことはありません。(読者の声、135頁)。</p>
2012	5	迷いどころをスッキリさせよう! 性器のお手入れまるわかりQ&A	ひよこクラブ	○	○	<p>Q お風呂で洗うとき、赤ちゃんの皮はむくの? / A 皮がむけそうなら、むいて洗って感染予防を／赤ちゃんの状態によりませんが、無理なくむけるなら(包皮と亀頭が癒着していないなら)、皮をむいて石けんと泡立てでやさしく洗って。包莖をそのままにしておくと、包皮と亀頭部のすき間に細菌が入りやすくなり、炎症を起こす可能性が。また恥垢という垢がたまることがあるので、できれば清潔にしてあげましょう。(76頁) Q お風呂ではどんなふうにするの? / A 可能なら、赤ちゃんの皮をむいて洗いまししょう。Q 皮はいつどのようにするの? / A お風呂に入る前に、やさしくむいて/Qとれくらしいの月齢から/Q皮はむいたほうがいいの? / A 目安は6ヶ月。でも、無理はしないで! / むきやすいなら、いつからでもいいですが、6ヶ月ごろになると、比較的むきやすくなるでしょう。亀頭包皮炎になるのは1才ごろからなので、あわててむかなくてOK。/ Q お風呂では毎日むいて洗ったほうがいいの? / A むきやすいなら毎日むいてもOK 力をまったく入れなくてもむけるなら、毎日むいて洗ってもOK。皮をむくのも赤ちゃんとの信頼関係やコミュニケーションが大切。むきにくい場合や赤ちゃんが嫌がるときは無理にせず、時期を待って。(79頁)。</p>

2013	9	ママもパパも知っておきたい よくわかるオチ ンチンの話	岩室紳也監修	○	この水では、主としてオチンチンの清潔と成長の観点から、オチンチンの皮(包皮)をむく、「むきむき体操」を紹介しています。お子さんの包皮をむくか、むかないかは、ご家庭でよく相談して判断してくださいます。……始める時期はいつでも構いません。生まれてすぐからでもいいし、小学生になってもいいし、小学生になってもいいですが、早く始めるほうが親はやりやすいでしょう。……ただし、お子さんが泣き出したら痛むというサイインですので、無理をしないでください。やり始めたところは痛がらなくても、続けているうちに痛がらなくなります(44頁)。 「むきむき体操」に否定的で、オチンチンの皮むきトレーニングをすすめない医師もいます。そういった医師たちは、一度も包皮をむいたことがなく、オチンチンもちゃんと洗えない若者が少なくないという現状をよく知らないのかもしれない(79頁)。
2014	8	理吹き男の子と 早咲き女の子は どう育つ? ど う育てる?	ひよこクラブ	○	Q 男の子のおちんちんの皮はむいたほうがいいの? / A 皮が無理なくむけるなら時々むいて洗って/清潔を保つためにも、皮が無理なくむけるなら、時々軽く引く張る気持ちでもむいて洗って。ただし、皮をむくときに、少しでも力が必要なら無理にむくのはNG。皮がむけないうちや嫌がるときは、皮の上から洗剤料を使って洗えば大丈夫(44頁)。
2015	7	男の子のママへ 本人が大人にな って悩まない おちんちんケア	岩元 妙子監 修・指導、桐 山梨江作画・ 漫画	○	赤ちゃんのうちに包皮をムクことによるデメリットははつきり言いありません/あえて言えば毎日ムクの面倒/ムキ方がわからない・いたそう/かわいそう・バイ菌が入りそう/結論:「赤ちゃんの包皮を(ママ)ムケたおちんちん」/デメリットはナシ/メリット多し!! ……(生後)1週間たったらムキなさい(29頁)
2016	4	“おちんちんの 皮”むく? vs むかない? ど っちが正しい の?	ひよこクラブ	○	日本では専門家の間でも赤ちゃんのおちんちんの皮をむくかむかないかで考え方が分かれている/おちんちんの皮は、赤ちゃんのころから親がむいてあげたほうがいいのか、思春期になって本人に任せたほうがいいのか、専門家の間でも意見が分かれています。いずれにせよ、大人になる前にむいていければOK。それぞれの家庭によっても考え方が異なります(167頁)。 それ以外の派の洗い方/入浴前に皮をむいておきます……あま……あまり力を入れなくてもむけるようなら、皮が下がるところまでむいてOK。真性包茎の子は無理せず、引き下げられるところまでで済ませます。毎日少しずつ引き下げていきます(168頁)。 むかない派の洗い方/お風呂では皮の上から洗剤料で洗います/皮の上からでいいので、泡立てた洗剤料を使って、おちんちん全体を洗います。洗ったからお風呂で洗剤料をしっかりと落とし(169頁)。
2016	7	速いを知れば子 育てが楽しく 男の子・女の子 の育て方	ひよこクラブ	○	仮性包茎の場合と真性包茎の場合でおちんちんを「むく派」は入浴前に包皮をむいてやさしく亀頭を洗います。真性包茎で普段から「むかない派」は包皮の上からおちんちん全体を洗います(48頁)。

ちなみに、「むきむき体操」の提唱者とよばれる岩室紳也が、勤務先の厚木病院で指導を開始したのはこの第Ⅱ期にあたる1994年である（『週刊朝日』2002年10月18日：147）。この方法は、インターネットサイトや保健婦の指導によって広まり、後述のように2010年には「子育てのスタンダード」と呼ばれるまでになる。

手術は「簡単」か？

むくかむかないだけでなく、手術をするかしないかも、乳幼児の包茎をめぐるアジェンダの一つであった。「手術」には、包皮にメスを入れる背面切開や環状切除といった侵襲性の高いものから、器具による包皮口拡張、亀頭と包皮の剝離といった、比較的、侵襲性が低いものまでが含まれている。

手術が行われるのは、包皮口が極端に狭く尿が出にくい、亀頭包皮炎を繰り返す等、医師が必要と判断した場合に限られる。とはいえ、のちに述べる医師たちの「懺悔」から、1990年代まではわりあい気軽かつ盛んに手術が行われていたようだ。2001年に医師の山崎雄一郎が日本小児泌尿器科学会総会で行ったアンケートでは、子供の包茎を「手術すべき」と答えた医師は47%であり、「手術が不要」と答えた52%とほぼ拮抗していた（山崎2002：84）。

1994年の『ひよこクラブ』は、「手術は簡単」という説に疑問を投げかけるようなコメントを掲載している。医師へのインタビュー後記にはこうある。「よく本に書いてあるように「簡単な手術ですよ」と言われると思っていたら、お話の中では「簡単」という言葉は出てきませんでした。趣味はラグビーというエネルギーな先生が、糸のように細い精管や血管と格闘しているとか。小さな赤ちゃんほど難しさが増し、熟練が要求されることを知りました」（『ひよこクラブ』1994年4月号：136）。

時代をさかのぼると、小児包茎言説の言説空間には、手術は簡単で、受けるべきものという雰囲気が漂っている。包皮むきには否定的だった大田黒も、手術は肯定していた。「不潔にしていると陰茎ガンになる」という説⁸⁾に依拠しながら、「予防的な立場からいえば、包茎の手術は重要な意味がありましょう」と述べ、「真性包茎なら乳幼児期でも、排尿困難や反復性炎症があれば手術すべきです」としている（大田黒1984：35）。

五味も熱心な手術派だった。「まず第一に、すすめたいのは、赤ちゃんが生まれたらすぐに包茎手術をしてもらうことです」とアメリカ並みのスピード手術を推奨し、「手術と言ってもたいした手術ではないので、おおげさに考えなくてもいいのではないのでしょうか」と簡単さを強調している（五味1990：54）。

そのような言説が影響したのか、1990年代半ばは、手術を検討する親も少なくなかった。小児外科医の北谷秀樹は、まず父母の包茎観を明らかにしようと、若い夫婦を対象とした意識調査をおこなったが（北谷ほか1996）、そのきっかけは、「包茎の手術が必要なのでは」

と子ども連れてくる母親たちが多かったことだった（『週刊朝日』1997年4月11日号：127-8）

そこに『ひよこクラブ』が上記のように「手術は簡単」という説に疑問を投げかけた。手術を検討していた親は、再検討をせまられたのではないだろうか。

とはいえ、『ひよこクラブ』が手術に全面的に反対しているわけではない。「手術は簡単」説への懐疑を載せた記事に登場した宮野武医師は、早期の包茎手術に肯定的であった。また、1995年の『ひよこクラブ』には、「なんで日本では産院を退院するまでに割礼⁹⁾をしてくれないの?」、「あかがたまって病気になるやすいし、包茎だったらもっとかわいいそだよ。ぼくは痛かった記憶なんてないよ」とアメリカ人の夫にいわれ、今度アメリカで子どもを手術させることにしたという女性の投稿が、さしたる吟味も加えられることなく掲載されている（1995年7月号：194）。もともと手術に関心のあった読者の背中を押すぐらいの効果はあったかもしれない。

このように、包皮を翻転するかしないかという問題系のみならず、包茎手術をするかしないかという問題系においても見解が定まっていないのが1990年代前半から2000年代前半にかけての言説空間だった。まるで予備知識のない若い母親たちを迷わせ、悩ませるには十分すぎる情報の混沌が、「医師の間でも見解が統一されていない」というエクスキューズのもとで野放しになっていた。

父親向け言説——子どもを「小さい大人」とみなす

当時、父親向け言説は存在したのだろうか。採集資料のなかでは、たった1件だけ、週刊誌『週刊現代』に掲載された父親向け記事がある。「日本の父親に告ぐ… 息子の包茎手術は8歳までにせよ!」と題された、子どもの包茎手術をすすめる記事である（『週刊現代』2000年11月2日：52-3）。

この記事は、他の小児包茎の記事に比べるとだいぶ異色である。第一に、手術肯定派の見しか取り上げていない。井上毅一医師が、痛覚が発達していない新生児の手術に麻酔は不要であり、出血も痛みも少ないとしたうえで、「私も新生児の包茎手術をしたことがありますが、まったく泣きませんでした」と述べている。クランプと呼ばれる器具を手にした井上の写真に「これを使えば、包茎手術は10分で終わる」という説明が添えられ、新生児の包茎手術の手軽さが強調されている。

血管が発達していない7~8歳までにしたほうがよいという井上のコメントに、「3歳になるころには、すでに痛覚が発達していて全身麻酔が必要になる。これは危険を伴いますので、新生児のときに行うのが最善です」との別の医師（長谷川潤）のコメントが並べられている。子どもの包茎手術にはタイムリミットがあることを親に知らせるものだ。悠長に構えてはいられないのである。

母たちの包茎戦争

ところで、乳児の包茎手術には、出血や痛みが少ないというのは本当だろうか。1970年にアメリカ医師会の雑誌 *Journal of the American Medical Association* に掲載されたプレストンの論文は、新生児包茎手術は、出血、傷口の感染症、切除の痛みによるトラウマといった、さまざまな合併症を引き起こすことを指摘している (Preston 1970)。出血や痛みが少ないという説をうのみにするのは危険である。

翌年の1971年にはアメリカ小児科学会が新生児の包茎手術には医学的な裏付けがないとの声明を発表している (石川 2005: 46)。『週刊現代』の記事は「アメリカでは新生児の8割以上が包皮を切り取ってしまう」、「医学的には「包茎手術は幼児期に」が常識」と、アメリカでは新生児手術は当たり前といわんばかりの口ぶりで書いているが、プレストンの論文やアメリカ小児学会の声明を無視するのはアンフェアにすぎる。

さらに、「8割以上」という数字も疑わしい。2001年時点でアメリカで包皮切除手術を受ける男児の比率は55.1%である (石川 2005: 46)。記事が出た2000年時点で「8割以上」というのは考えにくい。

話をもとに戻す。この記事の異色な点の第二は、子どもを「小さな大人」としてまなざす視線が強いことだ。ありていにいえば、幼い男児を「将来セックスする男」と捉え、それを前提に子ども期の包茎手術をすすめている。

小児包茎をあつかう記事には珍しく、コメンテータとしてAV男優 (山本竜二) が登場している。AV男優にも包茎の者はいるが売れない、なぜなら、撮影前に局部をいくら洗っても臭くなるから、としたうえで、父親の思い出ばなしを語っている。

山本の父は元俳優で、女性にたいへんもてた。小5の時、いっしょに入浴したさい、「なんや、そのチンチンは。めくられへんかったら、女の口にねぶってもらえへんぞ」といきなりまくし立てられた。「以来、石鹸をつけて毎日ムクように心がけました。これが痛くて痛くてね」。思春期の子供にこんな思いをさせるなら、むしろ手術のほうがよいと編集部はまとめる。幼いうちに手術を受けさせることこそが「親心」であり「父親の役目」なのだという。

以前は真性包茎だったというお笑い芸人の江頭2:50も登場し、「真性包茎ならもちろん、仮性包茎だって、思春期には悩む。1年も2年も悩む人がいるかもしれない。これはもったいないですよ。子供のころから亀頭が露出していれば、早漏防止にもなる。よって女性も喜ぶ。ぜひ、包茎を撲滅してほしい」と、幼児期の包茎手術に賛成している。

リード文には「息子が“モテる男”になれるかどうかはあなた次第だ」とあり、母親に課されたのはまた別の種類の「責任」を父親に課そうとしていることがわかる。母親に課されていたのは、息子の性器をすこやかに成長させるという包括なミッションだったが、この記事が父親に期待するのは、息子をセックスのできる異性にもてる男にするという、きわめて限定的な役割である。

このように、手術肯定派の意見ばかりを掲載したうえで、息子を「将来セックスする男」と捉え、それを前提に子ども期の包茎手術をすすめるのが父親向けの記事だった。もちろん、母に課された「息子の陰茎をすこやかに成長させること」という前にふれたようなミッションも、息子が将来セックスできる身体に育て上げることが含意されている。だが、母親向けのミッションには、性器を清潔に保ち、感染症や排尿困難にならないようにするという、保健衛生の視点のほうはずっと強い。今回の調査において、この記事ほどあからさまにセックス面を強調した母親向けのメッセージは見つからなかった。そのような記事があったとしても、母親にそっぽを向かれることが容易に想像される。

かといって、この記事が父親に受けたわけでもないようだ。反響のある話題には後追い記事が出るものだが、同種の記事は他誌にはもちろん、『週刊現代』にも見当たらない。世間の耳目を引き、後追い記事が出されたのは、息子の包茎にどう対処したらよいか悩む母親たちについてだった。

小児包茎に悩む母たちのフレームアップ

2001年から2002年にかけて、子どもの包茎の対処に悩む母親たちを「ニュース」として報じる記事が登場する。先手を打ったのは、育児事情を取り上げることも多い『AERA』だった。その1か月後に『女性セブン』が後追いし、さらにその約1年半後に『週刊朝日』が取り上げている。

記事の作りはおおむね共通している。どの記事も、我が子の包茎に振り回される母たちを登場させている。育児書の「むいて洗え」という言葉にしたがった36歳の主婦は、何か月もかけてやっと4歳の息子の亀頭露出に成功した。「戻したらもったいない」と思い、一晩風通しよくしてやろうと、むきっぱなしのまま寝かせてしまった。すると、^{かんとん}嵌頓包茎を起こしてしまい、あわてて病院で処置した。「普通は思春期の男の子が自分でやって駆け込んでくるのに、母親がやったのは初めて」といわれ、恥ずかしかったという（『AERA』2001年2月12日：79）。

ちまたの大人向けの包茎情報に振り回される母もいる。「4才になる長男のおチンチンが皮をかぶったままなんです。雑誌の広告で見た“包茎”の状態とまったく同じ。学校でいじめにあったり、大人になって結婚したときに影響があるのではと考えると不安でたまりません。手術を受けさせようかと考えています」という声は、29歳主婦のものだ。この声に、「17年間、親子電話相談をしてきましたが、子供の包茎に関する相談は、これまでほとんどなかった。／ところが最近、“うちの子が包茎なんだけど大丈夫でしょうか”という相談が来るようになったんです」と困惑する相談員のコメントが続く（『女性セブン』2001年3月8日：196）。

そのほか、包茎についての予備知識がまったくないところに、3か月検診で「仮性包茎で

母たちの包茎戦争

すね」と子どもが診断され、大きな衝撃を受ける母親の事例、息子の包皮をむいたところ、尿路感染症に罹り、高熱を出させてしまったと反省する母親のネットの書きこみなどが紹介されている。まさに、「おチンチンと悪戦苦闘する母親たちの姿が浮かび上がってくる」記事の作りになっている（『AERA』2001年2月12日：78、『週刊朝日』2002年10月18日：146）。

悪戦苦闘する姿が醸し出すのが母たちの「哀れさ」なのだとしたら、『週刊朝日』は母たちの「残酷さ」、「滑稽さ」も描こうとしている。当時、息子が幼稚園の年長だった頃の横浜市のある主婦の話として、母親たちの中で「一気に皮をむく」療法が話題になったことが挙げられている。包皮防止のために「小学校に上がる前にやっておいたほうがいいみたいですよ」という母親の話に、別の母親は「そうなの？　うちは炎症を起こしていないけど、やっておこうかしら。一人だけ包茎で劣等感を持ってしまったらかわいそうだしね」と応じた。記事は次のように続く。

「かくしてこの母親の子供は数日後、仲の良い友達と2人で泌尿器科へ連れていかれたのだ。母親と看護婦たちに手足を押さえつけられるなか、悲鳴とともに皮をむかれたそうだ」（『週刊朝日』2002年10月18日：145）。

「やっておいたほうがいいみたいですよ」、「うちもやっておこうかしら」という母親同士の会話の気軽さと、手足を押さえつけられ悲鳴をあげる運命を甘受せざるをえなかった子どもの悲劇とが対比させられ、結果として母親の「残酷さ」が浮かび上がる文章となっている。

ただ、記事は、ストレートに母親の残酷さを糾弾したいわけでもなさそうだ。文章のそばには、スズメの着ぐるみを着て股間をおさえて涙を流す男児と、片手にハサミ、片手に切り取った包皮を手にして上機嫌の和服を着た母親とがユーモラスに描かれたイラストが掲載されている。舌切りスズメならぬ皮切られスズメと、おばあさんの構図である。

息子と母親に背を向けて新聞に見入る父親の姿も描かれている。「日本の父親」におなじみの「われ関せず」の態度である。ただ、何が行われているかには感づいているようで、その背中では震えている。頭には、恐怖感や焦りを表す「汗」の記号が付されている。

横浜の母のエピソードと皮切られスズメのイラストとの総体が演出するのは、「残酷ながらも、息子の包皮なんぞに執心する、滑稽な母の姿」である。結果として、母への共感がなないのはもちろんのこと、本来あってしかるべき施術を強いられる子どもへの共感も薄れている。最終的な印象は、「誰の味方でもない、ただただ珍しい現象を取り上げただけの記事」である。

本文で父親はどう描かれているのか。いずれの記事も、父の頼りなさを指摘する。

たいていの父親は自分の“過去”はあまり明かさずに、「そんなの放っておけばいいよ」などと言うのではなからうか。これではわが子の未知の部分を心配する母親たちの悩みはなか

なか解消しない。

(『週刊朝日』2002年10月18日:146)

夫に「三カ月の息子が仮性包莖と診断されたことを」訴えると、
「よく覚えてないけど、自然にむけたような気がする」
と頼りない返事。

(『AERA』2001年2月12日:78)

「本来なら正しいアドバイスができるはずの夫に相談しても、“小さいころのことなんて覚えていない”」(精神科医・高橋紳吾)

(『女性セブン』2001年3月8日:196)

父親のセリフが「そんなの放っておけばいいよ」、「よく覚えてない」とそれに類する言葉に限定されているのは、この3記事に限らない。わずかな例外をのぞき、今回の調査対象の資料のほとんどがそうである。どの父親も違う個性を持った人間であるはずなのに、こと子どもの包莖について取る態度は同一なのは驚くべきことである。「言説にあらわれた父親像がそうなのであって、現実はずう」という反論もあるかもしれない。しかし、冒頭にも引用したが、日本の母親20名にインタビュー調査したCastro-Vázquezは、包莖について夫が情報をくれたと答えた母親が皆無だったと述べている(Castro-Vázquez 2015: Chapter 6, Penile Infections)。

しかし、父の頼りなさを指摘するわりには、彼らをどう動かすべきか、記事は具体的な処方箋を提示しない。例外は『女性セブン』だ。イラストレーターのまついなつきは次のようにコメントしている。

「私は包莖について悩んだことはありません。うちではおチンチンに関しては父親の領域。「お母さんはおチンチン持ってないから、お父さんに聞いて」って子供にいます。女性である母親がおチンチンのことはわからないのは仕方ないこと。責任を感じなくていいし、父親なり医師なり、わかる人に聞くのがいちばん。

うちのように父親のレベルで解決できない場合も、そのままにせずに医師に相談に行くべき。“子供なら当たり前”といってもらえ、気も楽になるでしょうからね」(イラストレーター・まついなつき)

(『女性セブン』2001年3月8日:197)

まついの家では「おチンチンに関しては父親の領域」である。子どもから質問があっても、「お母さんはおチンチン持ってないから、お父さんに聞いて」と返す。「私は包莖について悩んだことはありません」というからには、子どもが口をきけない頃も心配をしていなかったということである。解決しない場合は最終的に医者に行けというのはオーソドクスな助言であるものの、父の無関心を嘆くのではなく、父に丸投げしてしまえというアドバイスには、そんな方法もあるのかと虚をつかれる。「女性である母親が責任を感じなくていい」という一言も頼もしい。巷にあふれるのは、「母親=女性だからこそ責任を感じる」という言説ばかりだからである。

母たちの包茎戦争

しかし、言説の歴史を見るかぎり、「おチンチンの領域は父に丸投げせよ」という助言がメジャーになることはなかった。「息子の包皮に奔走するなんて滑稽」といわんばかりに母の姿をうつしだす記事、母に向けてまちまちな包茎情報をあびせる記事はあっても、彼女たちが滑稽に奔走しなくてすむよう、適切なアドバイスを提出し、性器ケアに参加するよう母親以外の人にも明確なメッセージを出す記事は存在しなかった。

3つの記事はまた、立場の違う意見を紹介しつつ、小児包茎の対処法に定見はないと指摘する点においても共通している。『AERA』は、一生真性包茎でも問題はないとする山田真と、手術は不要だが「一生真性のままはまずい」という岩室紳也のコメントを掲載した。『女性セブン』は、子どもは成長するにつれて仮性包茎に移行して亀頭が露出するので、けっきょくは放置するのがよいと言外にほめかす高橋剛と、病気でないかぎり「みんなむく訓練をすべきです」という岩室を対置させた。『週刊朝日』も手術と包皮翻転の2つの問題を扱いながら、それぞれの賛成意見と反対意見を紹介している。

どの記事も、「医師の意見は分かれる」、「意見は真っ二つ」、「対処の仕方は、医師によってかなり異なっているのが現状」というばかりで、なにがもっとも適切な方法なのか、決して結論することはなかった。定まった結論をなかなか出さない医学界に向かって「もっとちゃんとやれ」と迫るのもメディアの役割だと思われるが、医師にたいする配慮なのか、そのようなことをする記事もない。

子どもの包茎に悩む母たちをニュースにした2001～2002年の記事は、小児包茎の言説史上においてどのような意味があったのだろうか。それは、「母親の小児包茎パニック」という現象をフレームアップしたことである。無知または情報過多で心配性の母親たちと、頼りにならない父親、そしてまちまちなことをいう医者たちという「キャスト」を揃え、のちのちまで続く「小児包茎劇場」という舞台をしつらえた。

「正しい知識を身に付けることが必要だ」といい、「お母さん方のために簡単に基本的な説明をしておこう」と先生ぶった態度は取るが（『女性セブン』2001年3月8日：197、『週刊朝日』2002年10月18日：146）、どれが本当に正しい方法なのか、記事が教えることは決してない。母の奔走ぶりをおもしろおかしくニュースにしはするが、だからといってメディアも「正解」を知っているわけではなかった。

消えた「頼れる父親」

頼りなさが強調される父親だが、例外がないわけではない。すくなくとも言説上では、「そんなの放っておけばいいよ」、「よく覚えていない」の2語以外の言葉も父親たちは発している。前述の「ママにはわからないおちんちんXファイル」（1997年5月号）には、小児包茎記事にはたいへん珍しい、「おちんちんのはパパにきけ！」というコラムが随所に掲載されている。いずれも「パパから読者であるママに向けてのメッセージ」の体裁をと

っており、母親を安心させるような内容である。

「外国ではおちんちんの皮を小さいうちから切るみたいだけど、切ったりむいたりしないでいいの？」とママに聞かれた。子どものころはそんなに神経質にならなくても大丈夫。お父さんにまかせなさい！（上くんパパ）

母親にはわからないものだろうから、父親が見ていてあげなくちゃいけないと思う。大人になってよけいな心配をさせたくもないし…。(和真くんパパ)

うちは女の子なのだけれど、男の子が生まれたら、おちんちんについては何でも答えてあげるつもり。娘が大きくなって「どうしてお父さんにはおちんちんが？」と聞かれても、ちゃんと答えない。（ほづきちゃんパパ）

思春期のころは包茎であることに悩んだけれど、日本人男性の3割くらいは仮性包茎だと何かで聞いたときに悩むのをやめた。気にしないことがいちばんだと思う。私自身今ではコンプレックスもない。（結花ちゃんパパ）

「お父さんにまかせなさい!」、 「父親が見ていてあげなくちゃいけないと思う」、 「おちんちんについては何でも答えてあげるつもり」との父親の発言は、読者である母親にとって実に頼もしいものに聞こえただろう。「私自身今ではコンプレックスもない」という声は、仮性包茎コンプレックスを克服した元・少年のものであり、我が子のペニスの将来を案じる母親に、「今から心配しなくても大丈夫」との安心感を与えたと思われる。

まちまちなことをいう専門家の「垂直的言説」よりも、シロウトである父親による、このような「共感的・水平的言説」のほうがよほど母親たちの力になったのではないと思われる。また、自分の気持ちをうまく言語化できない父親たちが、自らの考えを整理するにさいしても参考になっただろう。「共感的・水平的言説」を得意とする『ひよこクラブ』の面目躍如といった感がある。

だが、この手のコラムは、以後、『ひよこクラブ』からぶつりと姿を消す。『ひよこクラブ』以外の雑誌でも、「そんなの放っておけばいいよ」、「よく覚えていない」以外の父親の声が聞かれることはほとんどない。まついなつきの「おチンチンの領域は父に丸投げせよ」という言説がたどった運命と同様、「頼れる父親」の発言も小児包茎をめぐる言説空間でメジャーになることはなかった。

3-3 第三期：医師たちの転向（2003～2011年）

医師たちの転向——より侵襲性の低い方法へ

2010年前後、小児包茎言説において画期的な発言が聞かれるようになる。これまで積極的に手術をすすめてきた医師たちが、さして必要のない症状にまで手術を施してきたことを「懺悔」し、より侵襲性の低い方法へと「転向」した旨の発言をするのである。

もっともはっきりとした「懺悔」と「転向」の意を示したのは小児泌尿器科医の島田憲次だった。専門誌『泌尿器ケア』に次のようなコラムを書いている。

私自身もこれまでを振り返ると、先輩に言われるまま小さな子どもに包皮背面切開を加えていた時代がありました。術後のおちんちんがいわゆる「エリマキトカゲ」様となり、結果がよくはありませんでした。その後は外来で無理やり包皮を広げていた時代もありましたが、子どもは泣くし、出血はするし、自分の子どもだとしなないだろうな、と思いました。そして現在は包皮の拡張は小学校に入ってから、それも思春期前から十分だよ、というようにコロコロと方針が変わってきたことを白状しないとイケないでしょう。

（島田 2009：69）

正直な述懐である。執刀は先輩の言われるがままであったこと、術後の子どものペニス醜状を呈したこと、手術から包皮拡張に移行したものの、子どもを泣かせ、出血させて、「自分の子どもだとしなないだろうな」と思ったこと、その後は包皮拡張の時期を遅らせていることを「白状」している。

島田はまた、多くの包茎言説が忌み嫌う「恥垢」についても、既存の説と180度ちがう見解を述べている。包皮内は細菌の巣窟であるといわれるが、もし事実がそうなら、ヒトをふくめ包皮を持つ動物は滅亡していたに違いなく、プロバイオティクスの考え方が受け入れられている現在は、「包皮内の細菌はいわゆる“good bacteria”であり、外部から病原性細菌が侵入するのを防いでいると考えられています」という（島田 2009：66）。恥垢を炎症などの原因とみなす見解は多いが、それとはまったく異なる。恥垢に害がないのなら、その除去を目的とした包皮翻転も必要ないことになる。

「懺悔」と「転向」の意を示したのは、小児包茎の大家・矢島暎夫も同様だった。かつて「熱心な手術派」だった矢島は、1990年代はじめに手術をやめた。メスを入れずとも、ステロイド剤を塗るだけで包皮口の拡大ができる方法に出合ったからである。「これで治るのなら、何も子どもを泣かせて痛い手術をすることはありません」という2011年版『まじめなおちんちんの話』の記述からは、手術は「痛くない」わけでも「簡単」でもないことが分かる（矢島 2011：48）。

同書には、昔の矢島の本を図書館で読み、子どもを手術させようと連れてきた母親に、今は子どもに包茎手術をする必要がないと考えていることを伝えたエピソードが掲載されてい

る。「当時と現在とであまりに異なる意見を言われ、お母さんはかなり驚いておられました。本当に悪いことをいたしました」（矢島 2011：25）と、矢島は大幅に方針を変えたことを謝罪している。

かつて矢島医院で痛い手術をされた子どもが長じて父となり、自分の息子を連れてきた時のエピソードは印象的だ。「これを毎日ちょっとだけ包皮の先につけて包皮を下げていれば、亀頭が出るようになるからね」と子どものペニスの先に軟膏を塗ったところ、「えーっ、そんなにいいんですか！ オレのときは、先生、痛い手術したじゃないですか！」と父親が「怒った」。父親には、この20年間に治療法や考え方が進化したことを話して、「分かってもら」った。しばらくたってから子どものペニスを診たところ、経過は良好で、父親は「いいなあ、この薬は……」と「うらやましがって」いた（矢島 2011：26-7）。

我が子が手術をしなくてすむと聞きいて示した父親の「怒り」は、「なぜ自分だけがあんな痛い目に」という思いに根ざしたものだっただろう。その怒りは深く、「分かってもら」うための説明が必要だった。手術をしなくてすむ息子を「うらやむ」ぐらい、手術は少年だった父親にとって嫌なものだったのである。そのぶん手術や、手術を支持してきた矢島の「罪深さ」が引き立つし、矢島の「転向」が思い切ったものだったことが分かるエピソードである。

矢島はステロイド剤のみならず手による包皮翻転もすすめているのだが、その方法もきわめてソフトである。「痛い思いをさせずに、あせらないでゆっくりと剥きましよう」、「癒着は無理にはがさない／……無理やり下げると、痛いし傷がつきますので絶対にしないでください」と繰り返し述べる。危ないのは父親で、「自分もそうだったくせに」、子どもの包皮を無理やり下げて痛くさせ、出血させるという。最悪の場合は嵌頓包茎になる。時々、息子をそんな目にあわせた父親が子どもを連れて「申し訳なさそうに」診察室に入ってくることもあるという（矢島 2011：3, 68-9）。1981年版『まじめなオチンチンの話』には「痛みなどは上手にやれば感じないのがふつう」と書いていたが（矢島 1981：29）、多くの人は「上手に」できないか、上手にできたとしても痛いことを矢島は理解したようだ。

包皮の成長プロセスにかんする考え方も変化している。2011年版では、矢島医院で長年大人のペニスを診てきたが、性交に差し支えるようなものは一つも診たことがないとしたうえで、「そんな経験から私は、包茎のことは、基本的に「母なる自然」におまかせしていれば大丈夫だ、と考えてい」と述べる（矢島 2011：34）。

しかし、1990年代の矢島は、「癒着がなくなっても、意識的に皮をむかなければ包茎のままなんですよ」、「皮は自分でむかないかぎりむけないですよ。／お父さんたちは照れもあるし、ずいぶん昔のことだから、自然とむけるなんていうでしょうが、そんなことは絶対ないんです」（微笑 1994：100-2）と述べ、「自然にむけてくと信じてた」という考えを真っ向から否定している（矢島 1997：18-9）。2011年の「母なる自然」におまかせしてい

母たちの包茎戦争

ば大丈夫」とはかなり違う。

自然にまかせていれば大丈夫という発想を、「包皮の成長プロセス理解におけるナチュラル志向」と名付けるならば、それは2005年に小児科医の山田真も表明していた。山田は、親も子も解放されたゆったりした子育てを提唱する立場であり、小児包茎にかんしても「基本的にはほっとくことでどこが悪いの」という意見である。そして、「検診などでちゃんと〔恥垢を〕見て洗ってなどと、我々医者がいってきたことの影響が大きくなりすぎたところがあるね。それを反省している医者はいるよ」といって、徹底して恥垢をそぎ落とそうとする親や、そのように指導した医者を相対化している（『ちいさいおおきい・よわいつよい』2005年5月：22-3）。

このように、1990年代から2010年代はじめにかけて、小児包茎の治療法は、手術からより侵襲性の低いステロイド剤と用手による包皮翻転との併用へと移り変わった。その20年は、「人為的にむかなければ絶対にダメ」といわれた包皮の成長プロセスにたいする考えが、放っておいても大丈夫というナチュラル志向へと転じた20年でもあった。

変わらない母への叱責

ただし、「低侵襲・ナチュラル化」した矢島の志向性のすべてが変わっているわけではないことは付言しておく必要がある。1980年代に確認された、「男性的価値観」を解しない母を叱責する姿勢は健在である。

つい先日も「お兄ちゃんのおチンチンが弟のよりも小さいんです！」と、お母さんが大きな声で診察室に入ってこられました。……

しかし、お母さんが男の子の前で「おチンチンが小さい」なんて言うてはいけません。そこで私は、診察が終わってからお母さんだけ呼び戻して怒ったんです。

「だめだよ、お母さん、そんなこと言っちゃあ。男の子の前でオチンチンが小さいなんて言ったら、一生悩むかもしれないよ」

お母さんは分かってくれましたが、言ってしまったのですから、後の祭りです。

（矢島 2011：74）

「ペニスは大きいほうが立派である」という男性的価値観を支持しないところに、「だめだよ、お母さん、そんなこと言っちゃあ。男の子の前でオチンチンが小さいなんて言ったら、一生悩むかもしれないよ」という叱責は成立しない。矢島は「ペニスは大きいほうが立派である」という価値観を内面化しているか、すくなくともこの価値観が支配的な社会を容認していることになる。そして、「分かってくれた」というからには、その男性的価値観を母親に理解させるのに（表向きであれ）成功している。患者にとっての医療機関が、ただ病気を治したり心配事を解決したりするためだけの場所ではなく、特定の価値観を飲み込まれる場所でもあることが、このエピソードから伺える。

『ひよこクラブ』のナチュラル志向と続く情報の混乱

表2の2003年から2010年にかけての『ひよこクラブ』の情報を見てみると、2003年と2004年の記事3件はいずれも「包皮翻転積極派」だが、2006年から2010年にかけての記事は5件のうち4件が「消極派」になっている。『ひよこクラブ』においてもナチュラル志向の風は吹いていた。

「包皮をむいて洗うという説もありますが、私はおすすめしません」と明言する医師（大城清彦）が登場し（2006年7月：205）、病気になるケースをのぞき「医学的には早期にむかなくなくてはならないという根拠はありません」との解説が載り（2009年6月：111）、「赤ちゃんのときにむけていない子が、将来も包茎ということにはなりません。自然にむけるのを待っても問題はないです」と文字どおりのナチュラル志向が表明されている（2010年4月：144）。

2006年7月号では、炎症防止のために皮をむいて洗ったがために、かえって包皮炎になってしまったケースが紹介されている。この話題の中心は、炎症から包皮に膿がたまり、その膿を出すためにメスを入れたが、息子がひじょうにかわいそうだったということであり、皮をむいて洗うことの是非ではないのだが、読者に「包皮をむいて洗うのは危険」と印象づけるのに十分な内容である（『ひよこクラブ』2006年7月：206）。

恥垢についての考えも変わっている。2003年7月号では「そのままにしておくとも細菌が繁殖しトラブルを引き起こすことがあります。日ごろからお風呂できれいに洗ってあげましょう」（『ひよこクラブ』2003年7月：205）といわれていた恥垢は、2008年5月号では「細菌はなく、無理に取る必要はありません」といわれている。しかも、恥垢には、「自然に亀頭と包皮の分離が進んでむけやすくなる作用までであるという」（『ひよこクラブ』2008年5月：227）。洗い落とさねばならないものから、むしろ残したほうがいいものへと、恥垢の地位が一気に上昇している。

このように2000年代後半にナチュラル志向化した『ひよこクラブ』だが、だからといって、情報の混乱が収束したと考えるのは早計である。数年前にはまったく違うことを『ひよこクラブ』はいていたわけで、母親たちのコミュニティやネット空間には、「以前の情報」が残っている。そこに「新たな情報」が入ることで、いったいどちらが正しいのか、母たちは迷うだろう。同時代の別の媒体では別のことをいっていたりもする。

さらにややこしいのは、「皮をむく必要はない」というナチュラル志向が長くは続かなかったことである。2011年以降には、ふたたび包皮翻転への積極的姿勢が示されるようになる。さすがに冠状溝までむいて、ごしごし洗えという指示はなく、「無理に洗う必要はないけれど」、「毎回でなくてもいいけれど」、「ママに余裕があれば」という留保つきのソフトな翻転推進ではある。しかし、「皮をむく必要はありません」との断言は出てこない点で、ナチュラル志向とは袂を分かつている。既存の包皮翻転積極派、消極派の意見があるところに、

母たちの包茎戦争

ソフトな翻転積極派という第3項が出された格好となり、情報の混乱がさらに深まりこそすれ、収束することはなかったと考えられる。

2度目の母たちのフレームアップ

2001年から2002年にかけて、「小児包茎に悩む母たち」がフレームアップされたことはすでに述べた。2010年、ふたたび母たちが週刊誌で取り上げられる。先鞭をつけたのは前回と同じく『AERA』だった。9年ぶりの再登場だが、その記事の骨子は前のものとほとんど変わらない。子どもの包茎に悩む母がおり、知らんぷりをする父がいて、手術と翻転について医師の間でも賛否両論があることが書き添えられている。女性読者が多い雑誌であるためか、どこか母に同情的な筆致も前回と同様だ（『AERA』2010年3月29日：36-7）。

次に科学作家の竹内薫が『週刊新潮』のコラムで「ムキムキ体操」を取り上げた。こちらは、母たちを「おもしろがる」態度が色濃く出ている。「日本中でおむつ交換の際にお母さんたちが愛児のおちんちんを剥いている光景を想像し、ボクは思わず笑い転げてしまった（ゴメン!）」と、臆面もなく告白する。冒頭で「ウチは育児を始めて2カ月。ムキムキ体操なるものの存在を知ったときは、軽い衝撃を感じた」と述べ、子どもは男児かと読者に思わせておいて、「ま、ウチは女兒なのでムキムキ体操は無関係であるが（笑）」とオチをつけるコラムの構成も、竹内の「おもしろがる」態度を引き立たせている（『週刊新潮』2010年10月28日：67）。

「むきむき体操」は「親心か見栄か、それとも余計なお世話か」と疑問を投げかけたのは、『週刊ポスト』である。もっとも、挑発的なこの疑問はタイトルにあるだけで、記事の中身はいたってオーソドクスな、悩む母、無関心な父、賛否両論に分かれる医師の3者がおりなす「小児包茎劇場」の描写である。強いていえば、「聞いているだけで、男なら股間がモゾモゾしてくる」という男性ならではの感想や、“むく練習”をした少年期の回想が付されている点が目を引くが、それ以上の新規性はない。

全体的に、2001～2002年のフレームアップと2010年のそれには大きな違いはない。まるで時が止まっているかのようだ。変化といえば、岩室紳也が提唱する「むきむき体操」の位置づけが変わっていることぐらいである。2001～2002年におけるむきむき体操は、それまで小児包茎の解決法としてメジャーだった手術という「王者」を引きずりおろす「挑戦者」だった。「とにかく手術は絶対いらない」という言葉が岩室から聞かれ、包皮翻転の正当性が説かれたうえで、「手術はいらないと考える医師は少しずつ増えているはずですよ」といわれていた（『週刊朝日』2002年10月18日：147）。換言すれば、手術は「保守」、むきむき体操は「革新」だった。

それが、2010年代になると、むきむき体操のほうが他者からの挑戦を受ける「王者」に位置するようになっていく。むきむき体操は「育児雑誌や育児情報サイトでも取り上げられ

て、いまや子育てのスタンダードになろうとして」いる方法論であり（『週刊ポスト』2010年11月19日：136）、岩室の病院は悩める母たちの「駆け込み寺」となっている（『AERA』2010年3月29日：36）。

その「王者」に、「無理にむくべきではない」という「挑戦者」の意見が対置される。翻転を推進する岩室にたいして、「赤ちゃんなら、親にむかれて痛みを感じることはないかもしれない。しかし、2～3歳にもなれば大抵の子は嫌がりますし、それを執拗に親が追い掛け回せば、トラウマになる。無理にむいて皮が裂け、そこが硬くなって逆にむきにくくなってしまうこともあります」（小児泌尿器科医の白髪宏司）という、むきむき体操の心身両面への悪影響を指摘する説が紹介されている（『週刊ポスト』2010年11月19日：137）。

2001～2002年にも、むく派とむかない派の対立は言及されていたが、むきむき体操は「スタンダード」、「かけこみ寺」とはいわれていなかった。2010年までの約8年のあいだに、むきむき体操が急速に市民権を獲得していった様子が伺える。

とはいえ、繰り返すが、これは微細な変化に過ぎない。2001～2002年と、2010年の記事との間に、構成面での大きな違いはなく、大局的には、以前と変わらない「小児包茎劇場」が展開し、同じようなキャストが同じようなセリフを繰り返しているのみだった。

3-4 第Ⅳ期：小児包茎ケアの自己責任化（2012年～）

2011年以降、『ひよこクラブ』は、「むけそうなら、むいて洗って」というセリフに代表される「ソフトな翻転積極派」の意見を掲載しつづけた（表2）。「包皮をむいて洗うという説もありますが、私はおすすめしません」（2006年7月：205）といったナチュラル志向は、退場をせまられたことになる。

しばらくはソフトな翻転積極派の意見を掲載しつづけた『ひよこクラブ』だが、2016年4月号でこれまでにない目新しい特集を立てた。「お風呂で赤ちゃんの体を洗うときに、おちんちんの皮をむいていますか？ むいていませんか？ 医療関係者の間でも意見が分かれているこの問題」と、小児包茎をめぐる情報の混乱を明確に意識したうえで、「むく派」と「むかない派」のメリットとデメリットを比較する内容だった（『ひよこクラブ』2016年4月：166-9）。

比較表の冒頭には「仮性包茎ならむく派へ／真性包茎なら〔むく派とむかない派の〕どちらかを選んでね！」とあり、同誌初の母親に対処法を選ばせるシステムになっている。乳幼児のほとんどは「真性包茎」なので¹⁰⁾、必然的に多くの母親が自分でどちらかをチョイスしなければならない。

むく派のメリットとして掲げられているのは、「将来起り得る包茎で悩ませない」と「病気が予防できる」である。自然にむけるのは6割で、あとの4割は大人になってもむけないという調査を紹介したうえで、「思春期になってむけないと親に相談しにくく、友だち

母たちの包茎戦争

にからかわれることも。赤ちゃんのころからむき続ければ、将来子どもが悩まずに済みます」と、子どもの将来を担保にした「翻転のすすめ」をおこなっている。

デメリットは、「赤ちゃんに痛い思いをさせてしまう」と「継続してむかないとむきにくくなる」である。基本的に、子どもが痛い思いをすることほど母親にとって辛いことはなく、むくことを躊躇させるのには十分な説明である。さらに、「むくのをやめると前より包皮口が狭くなり、逆にむきづらくなることが」とあり、いったんむきはじめたら後戻りはできないことを示唆している。

一方のむかない派のメリットは、「ママが戸惑わず手間もかからない」、「赤ちゃんに痛い思いをさせずに済む」である。むく派のメリットで紹介されたのと同じ調査が引用され、思春期にペニスが大きくなり、勃起を繰り返すことで、「約6割の子が自然とむけます」と説明されている。ただ、4割の子は放っておいてもむけないわけで、6割の可能性に賭けるか否かを読者に迫るギャンブル的な匂いが、この言説からは漂っている。

デメリットは、「いつか自分でむくよう指導しなければならぬ」と「病気になる心配がある」である。4割は大人になってもむけていないことを重ねて引き合いに出しながら、「わが子がそうならないよう、身のまわりのことを1人でできるようになったら、自分で皮をむいておしっこをしたり、お風呂で洗ったりすることなどを親が指導する必要があります」と記事は書く。身の回りのことができるよう、我が子をしつけることが「デメリット」なのかという疑問は残るが、ともかく記事ではこのような位置づけである。むかないことで罹るとされている病気は、亀頭包皮炎と尿路感染症だ。「大人になっても真性包茎の場合、陰茎がんのリスクも」と書かれているが、アメリカ癌協会が恥垢の発癌性を否定したことに見られるように（今村 1994：633）、真性包茎が陰茎がんに直結するかどうかは断言できない。

迷う読者のために、どちらが適切なのかを決めてあげるチェックリストもある。「どっちにしようかまだ迷っているあなた！ どちらが向いているのか、以下の表でチェックしてみてください。これでもう迷わない!!」とのリード文の下に、「A」「B」の2つの項目がある。「A」には「将来子どもを包茎で悩ませたくない」、「お風呂でおちんちんをむいて洗うのは苦ではない」、「あらゆる病気の芽を摘んでおきたい」という項目がチェックボックスとともに並べられ、「B」には「なるべくなら赤ちゃんに痛い思いをさせたくない」、「自然にむけるのを待ちたい」、「むき方を指導する時期をなんとなく決めている」とある。これらの項目が比較表の同語反復の域を出ないのは明らかである。

最後に、「Aの項目に多くチェックがついたあなたはむく派」、「Bの項目に多くチェックがついたあなたはむかない派」という「診断」が下される。はたして、この診断は、「どっちにしようか迷っているあなた」の参考になるのだろうか。「将来、子どもを包茎で悩ませたくない」し、「痛い思いもさせたくない」から、母は悩むのではないか。

このように、1993年の創刊以来、包皮翻転積極派と消極派の間を往来してきた『ひよこ

クラブ』が、20数年の年月を経て行き着いた「解決策」が「読者に判断を投げる」であったのは、特筆すべきことである。

たしかに、現代の育児雑誌は、母親たちが自ら主体的に選択・構築していく前提となるような言説の構造を持っている（高橋 2004：102）。しかし、こと小児包茎言説にかぎっては、その法則は当てはまらなかった。「女のパパには分からない」（1995年7月：193）から、専門家の意見が偏重されるのがこの種の記事の特徴であった。

だが、「あなたはどちらを選びますか？」と問いかける2016年の記事は違う。他の育児記事なみに、母親に「主体的に」選ばせるフォーマットが、20数年遅れで小児包茎記事にも訪れたことになる。

この現象は喜ばしいことなのだろうか。本稿は、専門家や編集部にもできなかった判断を母親にゆだねる点で「酷」ではないかと考える。

育児期の母親のストレスに詳しい心理学者の大日向雅美は、小児包茎に苦悩する母たちを報じる2010年の記事で次のようにコメントしている。「包茎を母親に治せというのは、女の子の月経を父親に教えろというのと同じような無理を感じる。医学的にも意見が分かれているものを母親ひとりに押し付けるのは酷です」（『AERA』2010年3月29日：37）。

このコメントは、そのまま『ひよこクラブ』の2016年記事にも当てはまる。大日向が言外に意味するのは、「父親も関与せよ」ということである。たしかに、2016年記事では、「パパの意見に従って」むかないことを決めた声小さく2件掲載されており、すべての母親が孤独のうちに格闘しているわけでは必ずしもないことが示されている。だが、これまで多数の記事が指摘してきたように、父の関与という「僥倖」に恵まれない母親はあいかわらず一人で悶々とするしかなく、「むく派」と「むかない派」のメリットとデメリットをいくら並べられようとも、問題は解決しない。はじめての試みをなした『ひよこクラブ』の2016年記事は、母親にとって親切なようであり、決してそうではなく、包茎ケアを自己責任化するものだった。

4 まとめと考察

以上の小児包茎の言説史をふまえて、3つの作業仮説について答える。

作業仮説①「小児包茎をめぐる言説は40年ちかく混乱し続けている」は肯定された。小児包茎の対処法の言説には、手術の是非をめぐる問題系、包皮反転の是非をめぐる問題系の2種類があるが、いずれにも賛成派と反対派があり、決着のつかないまま40年が経っている。

全体的に、小児包茎言説ですすめられる対処法は、侵襲性の低いものへと移行している。1980年代までは「熱心な手術派」だった医師の矢島暎夫は、2011年には子どもへの包茎手術を否定し、ステロイド軟膏の塗布と用手による包皮翻転を採用していた（矢島 2011：

24-7, 48)。

一方、「包皮をむくか否か」という問題系は現在に至るまでくすぶり続けている。『ひよこクラブ』は号によって、あるいは同じ記事の中でも、無意識的に異なる見解を掲載していた。明確な意図のもと、「むく派」と「むかない派」を比較する記事が掲載されたのは、やっと2016年になってからである（『ひよこクラブ』2016年4月号）。だが、それが悩む母親に有益だったかどうかは疑わしく、たんに包茎ケアが自己責任化されただけともいえる。

作業仮説②「小児包茎をめぐる母親向け言説は共感的・水平的な形式を取り、どのような選択肢を選ぶかは母親に最終的に決定させる内容を持つ。ただし、それは母親にとって脅迫的なメッセージをも内包する。一方、2010年代以降は、父親に協力を求めるよう母親に促す言説も見られる」は、否定された部分と肯定された部分とがある。否定されたのは「小児包茎をめぐる母親向け言説は共感的・水平的な形式を取り」という所で、じっさいは著者や監修者である専門家の意見（垂直的言説）が支配的である。

「どのような選択肢を選ぶかを母親に最終的に決定させる」記事は、存在するには存在したが、登場はだいぶ遅く、2016年であった。それまでは著者や監修者が各々の信念にしたがってまちまちなことを述べ、「母親に決定させる」以前の状況をきたしていた。

「それは母親にとって脅迫的なメッセージをも内包する」という点は肯定された。主に1980～90年代の男性医師の著作が、乳幼児期における母親のケアのいかんによって、息子の性器や性格の将来が決まるといった、母親に全責任を負わさんばかりの言辞を説いていた（山本・矢島1982：148, 五味1990：62-3）。

「2010年代以降は、父親に協力を求めるよう母親に促す言説も見られる」は否定された。『ひよこクラブ』などのノウハウ記事はそうしたアドバイスをほとんど掲載しなかった。報道・論評系の記事は、父親の無関心さを指摘するものの、その父親をどう動かすかを論じない。まついなつきの「オチンチンの領域は父に任せる」という、わずかな実践例の紹介をのぞき（『女性セブン』2001年3月8日：197）、父を動かすことを志向する言説じたいが見られない。

作業仮説③「父親を性器ケアに向かわせる言説は存在しない。だが、2010年代以降は別である」も否定されたといってよい。時期を問わず、そのような言説は唯一の例外をのぞき、存在しなかった。例外は、男児の性器ケアに参加せよと父親に求めた医師の五味常明の言説である。だが、実は自身には息子がおらず、本文で提案した「オチンチンシップ」を実践したことがないことを「あとがき」で自白している。読者を性器ケアに向かわせる「力」が五味の言説にあったとは考えにくい。

以上の結果をふまえ、「小児包茎の対処法をめぐる言説は、何を語っていないのか」という当初の問いに答えるならば、①小児包茎の対処法についての明確な方針、②母親同士で交わされる小児包茎についての共感的・水平的言説、父親を動かすための母親向けの情報、③

父親を性器ケアに向かわせる言説，である。

ジェンダー視点をふまえつつ一言でまとめれば，小児包茎言説でドミナントなのは，（内容はまちまちでありながらも）男性かつ専門家である医師の声であり，排除されているのは，女性かつシロウトである母親の実感と，男性ではあるがシロウトの父親が性器ケアに参加するであろうという想定である。そうした言説空間のなかで，時に叱責されたり，馬鹿にされたりしながら，母が孤独のうちに子どもの包茎と格闘している。まさに「母たちの包茎戦争」と名づけるにふさわしい闘いが，あちこちの家庭で起きている。

40年間つづく，女親ばかりが小児包茎について悩み，男親は遠ざかる状況を打開する鍵はどこにあるだろうか。第一に，小児包茎言説では排除されてきた「母の実感」や「シロウトの経験」を取り込むことであろう。「包皮をむいてみたけれど，子どもが痛がってかわいそう」「もっと別の方法がないのかしら」という，母親の実感や経験にもとづいた会話が雑誌上で交わされてもよいと思われるし，「ウチはこうやってパパを動かしました！」といった母親間の知恵の交換があつてしかるべきである。

第二に，父親を息子の性器ケアへと促す言説を生産することである。「お父さん，出番です——男の子の性器ケア」，「お風呂担当のお父さんだからできるオチンチンの洗い方」といった記事があつてもよい。五味（1990）の「オチンチンシップ」は突飛ではあったが，その基本的構想を継承しながら，すでに父親たちが参与している，お風呂入れやおむつ替えの延長線上でできる性器ケアについての情報をもっと掲載されてもなんらおかしくない。また，「息子の包皮むきにトライしたけれど，痛そうでとてもできない！」といった実感をまじえた父親の体験談があつても全く不自然ではない。あるいは，性器ケアのチャンスはあるのに，しない，できない父親たちの心情を言説化するのでもよい。むしろ，こうした言説が排除されていることのほうが不自然で，今回、『ひよこクラブ』の「父親の育児」特集，父親による入浴，おむつ替えにかんする記事も縦覧したが，性器ケアについての言及は不思議なほど見当たらなかった。

母の実感や，父の体験・心情の集積が，包皮むきの是非をめぐる専門家間の論争に決着をつける可能性もあるかもしれない。子どもの包皮を開く前に，包皮についての議論を開いていくことが，事態を動かしていくのだと考える。

付記：本稿は2017年10月22日におこなわれた第69回日本教育社会学大会での発表原稿を改訂したものである。調査にあたっては，東京経済大学個人研究費を用いた。

注 —————

- 1) 『AERA』2001年2月12日号，pp.78-9，『女性セブン』2001年3月8日号，pp.196-7，『週刊朝日』2002年10月18日号，pp.145-7，『AERA』2010年3月29日号，pp.36-7，『週刊新

潮』2010年10月28日号, p.67, 『週刊ポスト』2010年11月19日号, pp.136-7, 『婦人生活』1979年9月号, p.251。

- 2) 「父親が息子の性器ケアに関与できる条件を導出する」のがこの問いに取り組む理由ならば、言説研究などせずに父親にインタビュー調査をするほうがよいとの意見もあるかもしれない。しかし、各種記事が報じるように、息子の性器ケアにたいして無関心を決めこむか、尻込みをするという「感情を言語化する以前」の反応を示すのが父親である。その人たちに息子の性器ケアに参加しない理由を尋ねたところで、解釈可能なまでに言語化された答えが返ってくるとは思わない。
- 3) 五味の著書で目をひくのは、9年前に刊行された矢島の『まじめなオチンチンの話』以上にくわしい説明がなされたうえ、男児のペニスのイラストが入っていることである。矢島の『まじめなオチンチンの話』にはイラストは入っていなかった。同書のヒットを受けて企画されたであろう婦人雑誌の特集には、むき方を解説するイラストはあったものの、肝心のペニスは描かれていない。かわりに、スモッグのような上着を頭までかぶった子どもの頭を、上着をずらして露出させる絵が描かれていた（『婦人倶楽部』1981年9月号：187）。何らかの事情で、暗喩表現にとどまったということだ。それと比較すると、はっきりと幼児のペニスが描かれている五味の本には、9年分の「進化」を見いだすことができる。
- 4) 包茎は将来的に本人が解決すればよいことで、「母親が責任を持つ筋合いのものではありません」という言説もあるにはあったが（小児泌尿器科医・川村猛。『婦人生活』1979年9月：251）、今回収集した資料のなかでこの種の言説はこれのみであり、一般的な認識ではない。
- 5) 1999年版以降、この告白はあとがきから消えている。「子ども」と「オチンチン遊び」をすくんだり本文に残っている（五味1999：88；2004：80）。
- 6) 「おちんちんやおしりの病気」（1997年12月号）は鼠経ヘルニアや肛門周囲膿腫といった女兒もかかる病気も扱っている。が、編集部も自認しているとおり「男の子の体験談ばかり」が掲載されているうえ、男児のみの症状である停留睪丸や包茎も登場しているので、誌面から受ける印象は「男児の性器特集」である。
- 7) 汐見は、「ある雑誌の編集長」の話にもとづいて、同じ雑誌のなかで、専門家の意見と親の意見とが矛盾する現象の背景について書いている。専門家に語らせる科学的・啓蒙的な記事を書くためのスタッフと、親の要望や気分をつかみ、それを自由に表現させたり、励ましを与えるページを担当するスタッフとに書かせているためだという。文脈的に、「ある雑誌」は『ひよこクラブ』ではなさそうである。「ただし『ひよこクラブ』『たまごクラブ』だけは、はじめから専門家による科学的知識の伝達は取り上げない方針でつくられている」と汐見は記しているが（汐見1996：140-1）、のちに見るように、小児包茎言説にはその法則は当てはまらない。
- 8) アメリカ癌協会は、恥垢には発癌作用はないという見解を表明している（今村1994：633）。
- 9) 「割礼」とは通常、宗教的な意味合いを含むものである。特定の宗派の信者だけが集まる産院でもないかぎり、そこで行われていることは割礼ではなく「包茎手術」もしくは「包皮切除」と表記するのが適切だろう。
- 10) ここでは記事の用法に依拠して乳幼児に「真性包茎」という言葉を使ったが、ほんらいは乳幼児に「真性包茎」という言葉を用いるのは不適切と思われる。医師の島田憲次は、思春期までは包皮と亀頭の癒着が続くことなどを考え併せると「小児期に病的意味合いを込めた「包茎」という用語を使うこと自体も不適切」と述べている（島田2009：66）。医師の白髪宏司は、

「包茎であるけれども生理的な状態で当たり前である」という意味をこめて、子どもの包茎を「生理的包茎」と呼ぶ（『週刊ポスト』2010年11月19日：137）。この2016年の記事でも生理的包茎という言葉は使われているが、同時に「仮性包茎」、「真性包茎」も使われており、分かりにくい。

引用文献（表1に掲載の雑誌記事を除く）

- 石川英二，2005『切ってはいけません！——日本人が知らない包茎の真実』新潮社
- 石黒真理子，2004「『子ども中心主義』のパラドックス——「共感型」育児雑誌の興隆」天童陸子編著『育児戦略の社会学——育児雑誌の変容と再生産』世界思想社，pp.105-33
- 今村榮一，1994「乳幼児の包茎と割礼の覚え書き」『小児保健研究』53巻5号，pp.631-4
- 大田黒和生，1984『ママも知らないボクのおチンチン』講談社
- 大塚二郎，1960『私の性教育——バッチくないのよ』紀元社
- 北谷秀樹・梶尾照穂・河野美幸・小沼邦男・野崎外茂次・桑原正樹，1996「小児の包茎に関する意識調査——治療指針の一助として」『日本小児外科学会雑誌』32巻6号，pp.884-90
- 小林明子，2017「息子のちんちん大丈夫？「むきむき体操」とむきあう母親の不安と孤独」（2017年9月4日取得，https://www.buzzfeed.com/jp/akikokobayashi/mukimuki?utm_term=.vax5KAm9N5#.ac6EXxDaJE）
- 五味常明，1990『母親はなぜ息子育てが下手か』ハート出版
- 五味常明，1996『お母さんのオチンチン育て』青樹出版
- 五味常明，1999『新版 お母さんのオチンチン育て』青樹出版
- 五味常明，2004『目からウロコの「男の子」育て——新装改訂版・お母さんのオチンチン育て』ハート出版
- 汐見稔幸，1996『育児産業と子育て——子どもと教育』岩波書店
- 時事通信社，2011「父親の育児参加に関する世論調査」（2017年9月4日取得，<http://www.crs.or.jp/backno/No646/6462.htm>）
- 島田憲次，2009「おちんちんの話：包皮の役割」『泌尿器ケア』14巻1号，66-9
- 高橋均，2004「育児言説の歴史的変容」天童陸子編著『育児戦略の社会学——育児雑誌の変容と再生産』世界思想社，pp.74-104
- 天童陸子，2013「育児戦略と見えない統制——育児メディアの変遷から」『家族社会学研究』25巻1号，pp.21-9
- 堀込和代・河内美江・清水愛・永井理枝・乗川みどり・茂木恵・森葵生・山越恵・岩室紳也，2003「親が行なう子どもの包皮翻転法の実態」『助産雑誌』57巻2号，pp.59-67
- 本田由紀，2008『「家庭教育」の隘路——子育てに脅迫される母親たち』勁草書房
- 矢島暎夫，1981『まじめなおチンチンの話——赤ちゃんからお父さんまで』冬樹社
- 矢島暎夫，1982『まじめなおチンチン相談室』冬樹社
- 矢島暎夫，1988「お母さんの知らないオチンチンの話」高橋悦二郎・水野肇・矢島暎夫『0～3歳の安心育児——脳からおチンチンまで』小学館
- 矢島暎夫，1997『はじめて、男の子——お母さんのオチンチン教室』フリープレス
- 矢島暎夫，2011『0～9歳の男の子のママへ——まじめなおチンチンの話』カンゼン

母たちの包茎戦争

- 山崎雄一郎, 2002「日本の小児の包茎は治療の対象か? —— 第10回日本小児泌尿器科学会総会アンケート集計」『日本小児泌尿器科学会雑誌』11巻1号, p.84
- 山本晋也・矢島暎夫, 1982「山本晋也の性的ニッポン人と一時間 —— 女性に贈るオチンチン先生のマジメ性談」『週刊サンケイ』31巻20号, pp.144-8
- Castro-Vázquez, Genaro, 2015, *Male circumcision in Japan*. Kindle Version, Retrieved from Amazon. com.
- Preston, Noel, 1970, "Whither the Foreskin?: A Consideration of Routine Neonatal Circumcision", *Journal of the American Medical Association*, 213 (11): 1853-8.
- Sharpe, Sue, 1994, *Fathers and Daughters, Male Orders*. London: Routledge.